

配慮すること ― それはまさに良い教育をすることだ

本稿は障害をもつ人たちを対象に支援活動をしている中で、障害をもつ子どもたち・生徒・学生たちに対してどのような教育ストラテジーをもって共に学び、教えていったらよいのだろうかということから次に示す本の一部を翻訳したものである。掲載した翻訳文章はまだ十分に練れていない箇所もあるが今後さらに検討し改訂をしていきたい。なお翻訳にあたってはできる限り原文に忠実であることを心がけたが、一部わかりやすい文章にするために原文とは異なる言い回しをしている箇所もあるのをご了解いただきたい。

原書：ACCOMODATIONS OR JUST GOOD TEACHING

Edited by BONNIE M.HODGE and JENNIE PRERSTON-SABIN

2006年11月1日

平井 利明

よい教育の方法のひとつとして差別のない適切な配慮

どの学期においても、高等教育を担当する先生方は、学生とよいコミュニケーション関係を築く責任がある。よいコミュニケーション関係は、学生にとって一人で学ぶことを身につける基礎となるものである。より高度なことを学ぼうとする障害をもつ学生たちが増えてきている。これらの学生たちに対してよい教育を行うということは、すべての学生のためによい教育をすべき要望が増してきているということの意味する。教育ストラテジーと配慮のためのこの本は、障害をもつ学生の学習ニーズに直面する高等教育の中で、教授者の教育ニーズを提言するために書かれたものである。第4章から第11章には、よい教育を実践した大学教育者によって書かれた多くの体験談を収集して各章の段落に収めている。良い教育の方法の一つに、完成度を求めながら、コースの完了に向けて障害をもつ学生を成功に導くように支援するというものがある。これは、教授者たちが、障害をもつ学生たちの学ぶ力あるいは知識を通して、適切な調整を彼らにさせることでこれを成し遂げている。言い換えれば、きちんとした学習ができる学習者となるために「適切な配慮をすること」である。これらの体験談を掲載した段落の中では、すべての学生のために良い教育を実践した例として、それぞれの著者によって行われたその支援が提示されている。

チッカリングとガムソン(1987)によるこれらの教育実践の要約は以下のとおりである。これらの段落の中で説明される「適切な配慮」が、これらの教育実践にそったものであるというのは明らかである。

大学在学学生におけるよい教育実践のための7つの法則

1. 学生と教職員たちとの接する機会を促す
2. 学生間の協力関係で学習することを促す
3. 活動的な学習を促す
4. 学習のフィードバックをさせる
5. 学習に要する時間に配慮する

6 . 高い期待をもたせる

7 . 学習のさまざまな才能や学び方など多様性を尊重する

よい教育を実践することは、学んでいるすべての学生の質を高める。このことに議論の余地はない。障害をもつ学生たちのために、よい教育を実践することは、一人で学ぶことへの自信、生涯にわたっての達成感、自分自身の信頼、そして自信の向上につなげる欠かすことのできないものであると思われる。

大学における障害をもつ学生と、学生の学問の成功との間をとりもつものは、彼らを担当する教授と障害をもつ学生とが継続的にお互いが影響しあうことである。そしてこの継続的なお互いの影響は、学問のネットワークを促進する一貫した管理組織体制によって支えられているものである。このような相互的な作用は、高等教育に向けての本質的な局面である。

障害をもつ学生に教えることについてのワークショッププレゼンテーションのための準備の中で、次に示すインタビューの一節は、“アンジェラとパークスレイのインタビュー” (Hodge & Preston-Sabin, 1994)”から引用しそれを編集している。ミス・パークスレイは、脳性麻痺と患っている。脳性麻痺であるために、体全体を移動させること、細かく動くこと、そして目によって機器を見、そして目でみた機器を手によって操作しようとする。しかし目と体の動作の不一致から機器を操作調整することができない。このため、あちらこちら体をぶつけるその損傷から発生する衝撃を最小限にすることを、障害者の支援機器等に要求している。インタビューは、大学の3年の在学中に行ったものである。彼女の大学における最初の2年間、彼女は大学における大学代数学の中であらかじめ履修登録に必要とされる数学、演説法の基礎のような大学の中核となる必須科目、社会学入門のような社会福祉事業を専攻するために必要とされる基礎的なコースを完全に自分のものにした。ミス・パークスレイのコメントから、彼女の教育目標達成において最も大切なことは、コミュニケーションとケアであったということが述べられている。彼女の障害は、数学を学ぶことに対して不利な影響を与えていた。しかし数学に対する彼女の学習力や彼女の学問に対する自信を通して、数学の学問的な達成は可能になったのである。

インタビューア :

大学における最初の学期に、あなたは面と向かってどのようなものに挑戦しましたか？

ミス・パークスレイ :

最初の学期、私は多くのことに面と向かって挑戦しました。最初は、構内を歩き回っていることができました。高等学校の間はずっと歩いていました。私は、椅子に制限されること、または時間通りに授業を始めること、あるいはまた本を運ぶことに対して心配する必要が決してありませんでした。しかし私は、動き回るのを手助けする椅子が何かを手には容れようと決めました。私を手助けするもの、それはすばらしい資産です。私は、2学期までノートをとれないという数学不適応を持っていることで、“先生。ちょっとこれわかりません。少しだけ特別に手助けしていただけますか。”と言わなければなりません。私は、能力開発研究室の人たちに感謝をしています。私の目標を達成できたのですから。

インタビューア：

あなたの数学不適應に対してどのような配慮がなされましたか。

ミス・パークスレイ：

私の数学不適應に対して、私たちが必要とした最初の配慮は、ノートテイキングでした。というのはノート無くしてはテストを受けることができなかつたからです。先生は、ツーカラムノートと呼ばれるシステムを考え出しました。私のためにノートテイカーが授業中にノートをとってくれます。ツーカラムノートテイキングシステムでノートを作ることで、ノートテイカーがとったノートより、更によりノートを得ることができるということがわかりました。ツーカラムノートシステムは、私自身でやることができ、私が規定の必修科目である代数学の授業に入ることを手助けしてくれました。私には、まだノートテイカーがいます。そしてノートテイカーは私に対して、教師が説明をしていることにより注意を払うことができるようにしてくれています。

インタビューア：

学問をする上においての強みをあなたは何だと思えますか？

ミス・パークスレイ：

書くことができることです。紙とか、口頭によるコミュニケーションはすごく有効です。

インタビューア：

あなたの性格や個性において何を強みとしてもっていますか？

ミス・パークスレイ：

いい質問です。私は積極的な姿勢をもっていると思っています。それは私のもっとも大きな強みです。良いことは、辛抱強く待てる人や我慢強くいられる力をもっている人のところにくると私は信じています。私は問題をかかえ、そして私の目標をなし遂げるために、問題に立ち向かう必要があることがわかっています。それゆえ私は目標を達成するためにやり通すことを必要としているのです。

インタビューア：

この大学で学んだどんなことが、あなたの卒業後に得る仕事の助けになりますか？

ミス・パークスレイ：

もっとも大切なことは、多くの人たちと働き学ぶことです。そうすることで多くの人たちが自分たち自身の中にいくつも問題を抱えているんだということがわかります。だれも完全な人なんておりません。もしあなたがみんなと一緒に働き学ぼうとするのであれば、あなたは彼らが働くのを手助けできます。彼ら自身が自立することや擁護することを手助けできるのです。もしあなたが、問題があるということがわからなければ、私はあなたを手助けできません。それは社会活動における私の目標、すなわち、私が障害に打ち勝つのではなく、彼ら自身が彼らの障害に打ち勝つことができるということを彼らにわからせるために彼らを手助けするのですから。

インタビューア：

もしあなたが大学の管理者たちと話す機会を得ることができたなら、彼らに何を言いたいですか。

ミス・パークスレイ：

最初に私が言いたいことは、学生のニーズに合った、学生を支援する能力のある学部教

員の雇用を継続して行って欲しいということです。私は、高等学校の最上級学年のころのことを覚えています。私は、代数を勉強したくて女性の教師まで歩いていきました。そうすると代数の先生である彼女は私に言うんです。“あなたは数学なんてできない”と。次の学期に私は、障害者をもつ人に適切な資料の提供を必要とすることが書かれた大学の願書をもって彼女のところまで歩いていきました。彼女は私を見て言いました。“あなたは大学に行きたいの？ あなたはそんなことできませんよ。” そうです。私は彼女にばかりにされました。もし学生のニーズを押し量る力をもつ教職員がいれば、そして学生が何を感じているか、そして学生が感じさせようとしているものを感じ取ることができる教職員がいれば、学生を成功に導くことはできると思います。

第2に私が言いたいことは、支援グループは学生たちに非常に有益であるということです。というのは支援グループの学生たちは、障害をもつ学生たちが自分のために設定した目標を達成しようとする違った角度で学生を見ることになります。それゆえ学生たちは、障害をもつ学生たちが達成したいという目標を達成させるための、代弁者であることを教えられるのです。

ミス・パークスレイは、彼女自身と彼女の先生との間においてお互いに影響しあうことの重要性をはっきりと述べている。学生と教職員たちとの開かれた気軽に触れ合うことができる機会によって、彼女は、大学での代数の学生として成功してやっていけるだけの必要不可欠な部分を助けられたことを経験している。彼女の積極的な態度やコミュニケーション能力は、おかしな話だが、彼女の高校時代の数学の教師と出会いによるираだちによって、よりするどく焦点があてられ、学習意欲がかきたてられたのかもしれない。彼女はまた、学生を成功に導くために大学の管理組織体制の中で、お互いが影響しあうことの重要性を強く暗示している。

ミス・パークスレイは、最初、大学に入る前は車椅子を使ってはいなかった。しかし彼女は、体力が劣ってきたため、教育目標を達成するために車椅子に頼らなければならないことは大切なことであった。彼女は、学問上、大学代数をすぐに履修登録をしようと準備をしていなかった。しかし大学代数は、大学代数の履修とともに必要とする援助技術を研究し学ぶために、数学的能力を高めることが彼女の教育目標として重要なことであった。障害をもつ学生間の協力、世話をする教授、そして学問上のネットワークを促進する管理部門は、アンジェラ パークスレイのような学生のために、すぐに教育目標を達成できるように、そして生涯学習のためのフレームワークを提供できるようにすることを可能にしている。

学生と教授との間の話し合いの過程を通して、成功への配慮が見出される。話し合いは結果として、共通の教育目標を理解し合うことであり、またそれを探ることである。そして目標が達成できるやり方をお互いに作り出していくということは、ぜひともやらなければならないことである。障害をもつ学生から学問上の支援を探しだし、すべての学生に手を差し伸べることは、教授の責任である。教授は、自分自身に対してこのような質問を最初にしなければならない。“学生たちの学習ニーズを話し合うために、学生を自分のオフィスに来させ、学生たちを励ますということがシラバスの中に文章として記載されているのか？”そして“学習支援のために学生が教授の所に行ける時間帯やオフィスアワーの時間

帯を伝えているか？”この案内が学期を通して提示されるということは、必須事項である。ひとたび学生が支援を求めて対話が始まると、よい教育者である教授は、自分自身と学生が尋ねるさまざまな突っ込んだ質問とともに自然な対話をかわすことになると思われる。

教授は、自分自身に次のような質問を問いかけてみるべきである。

- 1．学生と話し合いをする必要があるのか。そして DSSO（障害者支援サービスオフィス）はコース資料の体裁を障害者のためにかえることができるのか。
- 2．授業中に適切な教育調整時間を組み込む必要があるのか。
- 3．黒板や OHP 上に書いたことを正確な言葉で言っているか。
- 4．授業を行う際、違った時間帯あるいは違った場所で行うことがより効果的であるのか。どのように計画をすることが最善であるのか。
- 5．他の教員から助言を探し出せるか。そしてその教員は同じ障害あるいは類似した障害をもった学生とともに学習した経験があるのか。
- 6．プレゼンテーション資料を修正する必要性が生じたとき、コース内容を守ることによって学問的に優れた部分についての標準を維持できるか。

以下の質問は、学生を支援している教授が尋ねるべき事項である。

- 7．成功体験をした大学の科目にはどんなものがありますか。
- 8．なぜ、成功したと思いますか？
- 9．あなたが現在もっている強みは何だと考えますか？どんなところに難しさがありましたか？
- 10．授業のために特に準備をしたのは何ですか？テストではどうですか？

高等教育機関においては、教授は、ある事柄についての専門家である。しかしながら学生たちもまた自分独自の学び方について熟知している専門家である。障害をもつ学生たちは、大学への入学の許可を得るためにやり遂げなければならないいくつかのことがある。たとえば障害をもつ学生は、教授が伝統的な教室の中で必要な改造をしていかなければならないことを理解することは貴重なことである。ある事柄の専門的技術を組み合わせること。これは教授がすべきこと。そして学習について自己認識をすること。これは学生がすべきこと。教授と学生とのこの関係は、学生を成功に導くキーである。仮にもよい先生といわれる教授は、学生が学ぶこと、適応の仕方を変えていくこと、そして自然な形で配慮する方法を心得ている。

次の章では、それぞれ一人ひとりの学習者の学び方が異なるにもかかわらず、すべての学生と教授が共に実行できる“明らかなこと”があることに気づいてほしい。

また、学生と教職員が一貫してお互いが継続的に影響し合うことは、障害をもつ学生に適切な配慮を提供するための重要な最初のステップである。しかしもっと大切なこと、それは、学びの過程の中で学生たちが独り立ちできる成長のための本質的な最初のステップであるということである。

共に実行できることを見落とすな

by Maxine Elmont

障害をもつ学生たちは、さまざまな障害特性をもっており、その障害特性は細分化されている。そして細分化された各々の障害の特性に属する人数は多くはないが、それぞれの人たちは、障害特性に応じた独自のニーズをもっている。私たちの調査から、学生たちをよりよく支援する新しい技術や方法は、障害をもつ学生の可能性を実現するために、あるいは成功感や達成感を享受させるために、共に実行できることを見落とすことがしばしばある。たとえば私の最初の目標は、私があらかじめやろうとしていることを学生が認めるか、あるいは拒否するかのいずれかが自分で判断できることであった。このことは、開かれた、真にコミュニケーションができる基盤の上にたったの関係を始めるために重要なことである。そしてこのことは、限られた短い期間の中でおそらく信頼に変わってゆくであろうこと期待する。第一に、学生たちは何が自分たちに期待されているかを知っている必要がある。第2に学生たちは、怒られたり罰を与えられたりする不安をもつことなく十分に話しができる快適さを感じるべきである。これは簡単なように思えるかもしれない。しかし知ってのとおり、障害をもつ多くの学生たちは、権威をもつ者に対して信頼をおいていない。私はわずか15週でこの姿勢を変えようとした。私は、学生たちを分け隔てなく扱った。この扱いで学生たちは、何を期待されているかを知らなければならぬし、また分け隔てなく扱うことで、学生たちが納得したものは自分たちのためになるという自信を持たせる一つの方法でもある。特別なニーズをもつ学生たちは、講師と話し合うことで励まされる。このため彼らは、コースの目標の会合において、彼らを支援する配慮やサービスの必要性に関して私に伝えるよう言われている。多くの場合、障害をもつ学生一人ひとは、自分の障害を表に出すことを嫌がっている。彼らは、問題があるかもしれないことを否定しがちである。これがその事例かどうかかわからないが、コースに入る数週間前まで、私は、障害について知らないでいたかもしれない。失われた時間を取り戻すのは難しいが、私は学生に近づき、そして必要な手助けをしたいと思っている。

私の経験の幾つかを、次に述べる。

- 1 .アンドリューは、四肢麻痺者であった。彼の背骨は、自動車事故で損傷を受けている。彼は、再入学生の青年であり、彼の動きは、車椅子のほかに大学内におけるコミュニティのメンバーの支援が頼りであった。最初の彼の心配事の一つは、ノートをとることができないことであった。私は、学生たちに自分のノートもとり、彼のノートもとることを喜んでやってくれる人はいないかたずねた。学生一人ひとりの理解力は異なっている。このため二人以上のクラスメートから提供されるノートは、何が示されそして何が議論されたのかが書いてあったり、あるいは提示されたものだけが書いてあったり、議論されたことだけが書いてあったりなど幅広いとらえ方である。彼は、紙とカーボンつきの紙を指名したノートテイカーに渡した。この方法で、彼は授業の終わりごとにノートを受け取ることができた。アンドリューは、すべての授業の討論に積極的に参加し、貢献した。頭がよく、はっきりと意見が言える、行動的な青年であった。テストを受ける方法に関しては、お互いに同意の上であった。彼は、他の学生たちとともに同じクラスで試

験を受けた。こうした配慮は、彼が安心して問題を解き、概してどんな支援でも受けることができ、私に相談でできることを意味している。ボランティアたちは、書くことのほとんどをやってのけた。ボランティアたちは、他の学生たちから少しだけ離れて座った。というのはお互いのコミュニケーションによって他の学生に気を散らさないように、また邪魔をしないようにするためであった。私は、喜んで時間延長をしようとしたが、これは決して必要なことではなかった。彼は、私の授業の中で、また彼が選択している他のコースでもうまくやってのけたのである。そして転学しボストン大学を卒業した。

2. メアリーは、最近高等学校を卒業しており、彼女はすべての授業にきちんと出席していた。彼女はもの静かであり、授業中は非常に制限のある、いわゆる流ちょうではない方法で対話をした。彼女がうまくやったかどうかは推測することは難しい。彼女は単に最初の複数選択回答方式のテストで“キーキー声”を発していたに過ぎないのかもしれない。学生が授業中に読むことができ、聞くことができ、そしてノートをとることができ、自分やろうとする処理できないという特別な問題がなければテストにパスすることは当然のことである。試験は、学生たちの達成度を支援するために設定されたものである。試験は、ほんのわずかな人だけが優秀であるところでは邪魔にはならない。メアリー得点は低く、私の科目では赤点であった。このことは何かあったのか、なかったのかを見いだすのに重要なことであった。彼女がコースに関してどのように感じているのか、どのように勉強したのか、試験に対してどのような準備をしたのかを議論していると、彼女は、失読症だったと私に話した。私は、この情報を表に出すことはしないことに決めた。彼女は、そのための親切な行為を求めたくはなかったのである。彼女は、配慮を受けることが正当なことであり、無理した親切な行為ではないとわかったとき、私たちは次の試験のための計画をたてることができた。彼女は、彼女が必要とするすべての資料に関して私に見せる責任を明確にした。そして私たちは、次のテストはテープに録音したもので行うことに同意した。彼女は、授業中録音を取り、必要なときはできる限り録音を使用した。試験に加え、学生個々に研究が要求された。メアリーのテストの得点は、改善されたとはいえ、彼女はものすごい量の作業であった。彼女は、パートタイムで働きながら、すべてのコースの学習量をこなしている。私のやるべきことは、できるだけ多く彼女の代わりとなるものを提供することであった。そして学習するということ、彼女が受ける辛い苦しいものではなく、楽しいものであるということを彼女に思い起こさせることであった。彼女は、コースの負担を少なくして働き続ける決心をした。そして彼女は、4よりも多い5あるいは6の学期で単位を取得し終了した。彼女は、私のコースをやめることにしたが、進んで授業に出席し続けていた。彼女は繰り返しコースをとることを計画していたのである。彼女は、丈夫な学生ではなかった。そして繰り返しコースをとるという決定は、学問的に彼女を生き残らせるものとなった。彼女はまた、仕事をやめないでいる。そうすることで彼女は多くの喜びや満足を得ているのである。

3. カールは、中年の男性である。彼は、財政的に独立をしようとするならば教育が必要だと言った。彼の行動は、いくつかの重大な情緒的な問題があることを示していた。彼は非常に低いフラストレーション域を持っていた。このため彼が望んだ方法で物事がうまく行かないと思ったならば、非常にいらいらするようになる。カールは、威圧的に、強制的に何かさせようとする人たちの中で、彼は自分の考える方向にもっていこうと口頭で攻撃的になった。フラストレーションの原因の中には、運悪く彼がグループ分けの準備をしている場所にいなかったなどがある。彼の要求と忍耐不足は、授業目標と相容れるものではなかった。授業目標は、協力ととてつもなく個人のニーズから離れた設定がされていた。

彼は、彼の人生の初期の段階で見捨てられた。というのは彼が診断を受けたとき、情緒的な問題を持った非常に利口な一個人としてよりも、むしろ手間のかかる一個人として扱われたのである。しかしながら、彼は大人として学んだ。彼は、自分のために自分を作り上げるために学んだと信じている。彼は、彼が聞きたかったことを言ってくれる人を捜しオフィスからオフィスを回って歩いた。カールは、誰にとっても危険な人物ではなかった。しかし専門家や支援スタッフにした要求は、無分別であり不適當であった。学部長は、彼のアドバイザーとして、私が彼の要求に対処できる一人として決定した。彼の受けいれは、可能であった。しかし、それは大変な時間の消費でもあった。彼は、絶えず元気づけと限られた環境を必要としたのである。言うまでもなく、彼は前向きに限られた環境に必ずしも応えるわけではなかった。彼は在学中であることを望んだ。しかし彼は、事実上すべての成功の機会を壊してしまった。彼にとって失敗に対処することは、より簡単なことであった。というのは失敗が、よくやる行動パターンになるからである。私の同僚の数人との会合の後、私たちは、彼にとって文書処理証明プログラム（word processing certificate program）が、専攻した一般教養科目よりむしろよい解決策であるかもしれないと思った。カールと私はこの選択の賛否について議論した。カールは、文書処理学部の先生と会い、この専攻科目が十分やっていけるものであり、支持できるものであることがわかった。カールはそのプログラムに代わり、その年の終わりに卒業しただけではなく、彼を待つ仕事についた。卒業式は、彼にとっての業績であった。そして私たちにとっての成果は、彼とともに長く一所懸命学習したことである。彼が誇りと尊厳をもって式服と式帽を着用しているのを見ることは、よくやったぞという新しい意味をもった。

経験から私は、障害をもつ学生たちができる限り障害をもたない仲間たちと同じように扱われるべきであるということを教えられた。なされなければならない配慮がどのようなものであっても、最小限の混乱と多くの人たちの合奏で行われるべきである。おそらく障害をもつ人たちと一緒に仕事をする基本的なキーは、時間と忍耐そして講師の快・不快のレベルである。哀れみとか空しさはない。同情ではない共感は、学問でやり遂げようとすることや、仕事の世界で成功を収めようとする学生にとっては必要なことである。

障害をもつ学生たちのために“適切な配慮”をすることは、難しいことであるかもしれない。というのは配慮が必ずしも成功するという決まったものがないからである。入学許可がされた障害者をもつ学生たちが、自動的に配慮を受ける権利はない。しかしながら彼らは、もっている障害によってひきおこされる苦痛がないよう努力するという方法で授業に参加する資格を得ている。障害をもっている多くの学生たちは、教育目標や職業に関する目標を達成している。そして法的な訴訟として、障害をもつ学生たちは、どのようにしたら高等教育への保障がなされるべきかを明らかにし続けている。大学は、さまざまな障害によって苦しんでいる学生たちのために、誰もが等しく学ぶことができる適切な教育を推し量るあるいは配慮ができるよう教職員への期待を高めている。

最初に大学がすべきことは、教職員に対して障害をもつ学生たちの期待を言い渡すことである。それは、教職員に小冊子または手引き書を配布することである。この手引き書の配布の目的は、障害の問題についての知識を持たせることである。障害の問題は、教授の教育的な訓練の中で欠けているかもしれない。そしてこの手引き書の配布は、教職員と障害をもつ学生たちとの間で相互に必要な支援の大学管理組織の責任の一端を気づかせるものとなるかもしれない。この手引き書の焦点は“意識を高めること、そして教職員と障害をもつ学生たちの両者の利益のために基本的な情報を提供すること”にある。(リズナー, 1992) 優れた配布物の例に A Guide to Reasonable Accommodations for Students with Disabilities がある。これは L. スコット・リズナーによって書かれたものであり、バージニア州ロングウッド大学で使用されている。

次の章は、高等教育において教授によって成功をおさめた教育的な支援を説明している話題について提示する。この章は8つの機能的な効果のあるカテゴリーを提示している。

- (1) 注意力、集中力、あるいは記憶力に欠ける学生を教える
- (2) 慢性疾患をかかえる学生に教える
- (3) 難聴あるいはろう学生を教える
- (4) 統合処理困難な学生を教える
- (5) 肢体不自由、可動性機能障害、運動制御困難な学生を教える
- (6) 社会性行動に異常のある学生、首尾一貫した行動が困難な学生を教える
- (7) 言語障害学生を教える
- (8) 視覚障害学生を教える

各章の脇には支援と学習過程においてのキーポイントを強調する側注をつけている。各章を学び始めていくと、障害に関する重要語句欄とそれにつづいて一般的に関連する障害の一覧を提示している。多重障害をもっている障害学生や単にひとつだけ障害をもつ学生ゆえに、それが影響していくつかの障害を引き起こしているかもしれない。このため障害を提示したリストは、定さまったものではない。しかしリストに提示した障害例は、むしろ学生たちとコミュニケーションの輪を確立すること、学生のために意味ある教育ストラテジーや学習ストラテジーを研究しはじめる教授にとっての原点となる。しばしば用いられる教育的な配慮の一覧を、重要な配慮の欄として締めくくり提示する。

注意力、集中力、記憶力に欠ける学生を教える

注意力、集中力、記憶力に欠ける学生は、次に掲げる項目のうちひとつ以上の問題を抱えている。たとえば、講義を受けるとき、制限時間の中での読み書きをするとき、覚えなければならないときなどである。授業中、空想にふけったり、眠り込んだりしてしまう症状が現れる可能性がある。このような障害は、目にみてわかるものではない。(リスナー1992)

一般に関連する障害と症状

注意力欠陥障害
精神障害
学習障害
抑うつ病
てんかん発作障害
頭部外傷
睡眠障害
耳鳴り
失認症
失語症

障害をもつ学生とよいコミュニケーションを築くことは、その学生を成功に導く基本である。ここに、注意力、集中力、記憶力に欠ける学生とともに、よく考え、話し合うべき事柄として以下のような質問リストがある。

1. クラスの中で人の邪魔することなく、人に迷惑をかけることなく、この学生を講義に集中させるためにはどのような方法で手助けできるのか？
2. 学生のこれまでのコースの中でどのような方法のコミュニケーションがもっともうまくいったのか。それは読むこと？書くこと？話すこと？聞くこと？
3. 学生は、これまで、授業を録音するためにテープレコーダーを利用したことがあるのか？それはどのような場面で行ったのか？
4. 学生は、学習の手助けとしてノートカードを使ったことがあるか？
5. 学生は、授業にノートテイクを利用することで学習に役立ったのか？
6. テキストをそばにおいて、何が学生の手助けとなることができるのか？

よい教育実践を見極める

by Charles Babb

“俺は学習する余裕などなかったんだ”とモックタートル(にせ海がめ)はため息をつきながら言った。“正課のコースだけしかとらなかったんだから”

“正課のコースっていうそれは何？”とアリスはたずねた。

“まず学習でやったこと、よろめき方にそしてもたえ方、こんなことはもちろんのこと”とモックタートルが答えてきた。“それから算数の4つの分野、そうだな、野望算、失意算、台無し算、あざけり算、そんなのがあったんだ”(The Annotated Alice, Lewis Carroll by Martin Gardner, New York : Bramhall, 1960, P129)

普遍的なことや利他主義を避けようとしても、授業で学生と一緒にやっていく上において最初にして最も重要な戦略は、決して何かを想定しないままではないということを行うことが多い。あなたが書くもの、それは学生が見たくないものであるかもしれない。あなたが言うこと、それは学生たちが聞きたくないことかもしれない。あなたが問題に対してどのように取り組んでいくかは、同じ問題を解決しようとする学生たちの認識と関係がないかもしれない。冒頭の引用は、いくつかのひどいしゃれを含んでいる、しかし、それは私の指摘を実証するものでもある。また冒頭の引用は、数学における学生が以前経験したことについてよく述べていると思われる。

「典型的な」障害のある学生について記述する方法はない。しかしながら、特例として、どんな戦略が使われたかに焦点をあて言うことができる。

カレンは、失読症として診断され私の数学技術クラスに入ってきた学生である。彼女の体育アドバイザーは、学校が始まる前に彼女を教える講師たちがみなカレンの障害に気づいているかどうかを確かめた。次の事項はカレンが私の数学技術教室で学習していた間、私が使用した戦略である。

1 . 私は、黒板に書いたすべての文章や文字を、あるいはオーバヘッドプロジェクタで投影したすべてのことを大きな声を出して読んだ。

このことは、学習単元の初めに特に有効であった。たとえば、 $3(x+2)^2$ は、初等代数学の単元で私にとって多くの意味を持っていた。カレンは、私が何か書くことよりも“3かける左括弧×プラス2右括弧の2のべき乗”ということを知る方がより一層役にたったのである。私は、彼女にどこで、そして、どのようにべき乗が書かれているか、そしてまたべき乗が何を意味するかを思い起こさせるようにした。後に彼女は“3左括弧×プラス2右括弧の2乗”と読んだのである。

2 . 私は、何でも許せる環境を作り出した。そしてその環境ができたとき、カレンは、問題を解きながら、問題の解法の手順を段階的に説明できたのである。

私は、学生たちのいうことを聞くことで、学生たちの筋の通った技法についてたくさん学ぶことができる。もしカレンが問題を解く段階で何をしているのか説明ができないならば、じっと様子をみながら私は次にあげるような似た意味の質問を試みたい。

10進の加算を行うとき、なぜ小数点の位置を揃えるんですか？

方程式の両側に同じ数を加えることは、方程式に何を行っているのですか？

それは、その方法でやらなければいけませんか？

割り算記号の下の数は何ですか、なぜ私はそれを知りたいと思いますか？

代数におけるこのステップを算数から説明する技法がありますか？

3 . 私は、資料を提示するのに、できる限りさまざまな方法で提示するようにした。

私は、私が教えたテーマごとに、カレンが自ら扱うことができるよう、次のような多くのものを作り上げたり、見つけだしたり。例えば、オーバヘッド、ビデオ、ワークシート、オーディオカセットである。どのクラスにおいても学生たちは、学生個々の学習スタイルをもっている。このことは、カレンのような障害をもつ学生に特に該当するように思われる。

4 . 私は、学習することがカレンの最終的な責任であること、そして彼女にできる限り学習をさせようとするのが私の責任であることを常に心にきざむようにした。

私は、学生たちが自分に学習障害があること気づいていないのかもしれないと思う。私は先手をうつというストラテジーを使い、早い時期に学生を学習活動に巻き込んだ。それから私は、できる限り問題を発見しようとする機会をもとうとした。教える者として私はリーダーでなければならない。リードするためには、先頭をきってやる人がいなければならない。障害をもつ多くの学生が、過去の失敗のために非常に多くの情緒的な悩みを抱えて私のところにやってくる。カレンは、学問的では失敗していたが、それを補う他のもので成功をしていた。

私はすべての学生は個別固有であり、そして何が最良のストラテジーであるのかを明らかにしようとするのが、障害をもつ人たちのためであるということがわかった。以前に使用したストラテジーのリストは、現在の障害のタイプにかかわらず、すべての授業の中に取り入れることができる。私は、3学期間カレンを教えた。彼女は初等代数学をうまくやってのけ、そして最後に中級代数と大学代数コースを収め成功裏に進んだ。彼女は、3.25という学業の平均的な成績で予定どおり卒業した。そして彼女は3つスポーツで優秀とされた。私が彼女の障害にかかわっている間、私の授業の中で使っていた教育ストラテジーが他の学生達のためになっていた。

フランク：自分自身を主張する

by Susan Bartzak-Graham

多くの他のパートタイムの学部がそうであるように、私はしばしば学習状況の中で、パートタイム学生であるがゆえに、私が教えている授業に関わりあうのが難しくなっている学生がいることがわかった。わかりやすく、利用しやすい教育的な支援サービスの状況の中でさえ、サービスを利用しないことを選択する多くの学生がいる。学生の中には、あなたを教職員の一人としてたよりにしている者もいる。それは学生自身と教育的な問題との間のただ一人の調停役として機能するあなたとしてである。フランクは、そうした学生として学生生活が始まった。

私とフランクとは、ある地方のコミュニティカレッジで、朝8：00の心理学入門の最初の授業で会った。授業は、火曜日と木曜日の9：15までである。私は、天気の良い日に車で最低1時間半の道のりであり、決して午前10:00より遅くならないことを常勤の管

理者に伝えてあった。

フランクは35クラスの学生の一人であり、そのクラスの3分の2は男性である。そして19歳から22歳の年齢の学生が最も多い。彼は、何回かは仕事が終わってそのまま学校に来た。ほとんどのコミュニティカレッジの学生がそうであるように、コースを選ぶことに関しては特に合理的である。そして学生たちは、在学中であるという状態を続けるために、一般的に多様である。

フランクは、講義クラスで4列の第2列にメタリックのTシャツを着た友達と部屋の左側の近くに座った。友達というのは、高校時代の終わりちかくに親しくなった彼である。最初、フランクは、多かれ少なかれクラスの中で他の学生よりも注意深くなかったり、あるいは困ったりはしていなかったように見えた。しかし私は、彼がノートにそう多くは書いていないことに気がついた。

授業の3週目の終わりに、まさに最初に簡単な試験を行う前に、フランクはいくつかの分野で学習障害があるという事実を私に打ち明けてきた。そしてその学習障害というのは、彼がこれまで学習してきた人生にとってほとんどが第766章プログラムに関係するものであった。その後続けたこと、彼のために成しえた手助けについては、猫とねずみの相互性のゲームのようなものであった。そのゲームというのは“学習障害をもった学生”というラベルをつけられた学生の立場に立って、健常者が学習障害者を理解するというもので学生たちの間では珍しいものではなかった。私は、何が必要であるかを彼に尋ねた。すると彼は私に何ができるのかを聞いてきた。私は彼に高校時代に自分のために何をしたのかを尋ねた。すると彼は私に私がこれまでに教えた学生とやってきたことで何がわかったのかを話すように私に頼んできた。

彼は障害のために名前を書くことができなかった。そこで私は時間制限のないテストであるかのような“routine”(決まりきった方法)という配慮を提案した。そして講義を記録していった。この配慮は、適切であると彼は同意をしてくれた。しかし彼は、私ができるまだ他の方法がないかどうかを知りたがった。私は、障害が何であるのかを知るまでは、私ができること、配慮に必要なこと、してあげられる配慮が何であるのかを決めることは難しいということをととうとう彼に告げた。彼はまた、これらの配慮を求める一方、それに言及してきた。彼は、クラスの居残りを目立ちたくなかったのである。

フランクは、次の授業セッションの前に彼の学習障害の強弱について詳細に記述しアカデミックサポートサービスからの個人プロフィールファイルをもってきた。アカデミックサポートサービスは、学習指導に配慮するための推薦状を作成した。授業の終わった後、私たちは、彼にとって前向きな学習体験となるような授業をやっていくために、お互いに何ができるのかを座り、話し合いをもった。私たちは、彼のタイピング能力が手書きよりずっと速いということで、ノートの代わりとなるラップトップコンピュータを授業に持ち込むことでお互いに意見が一致した。私たちは、また、授業に先立って私の授業用のノートの写真を撮って彼に与えることで講義の概要を提供することにした。これも彼は同意した。これによって彼の学習障害のギャップを埋めることができた。私たちはこのほか、学期の間、自宅にテストを持ち帰ることによって、フランクが自分にとって必要な分の時間だけ余分にとらせることにも同意した。この方法は、フランクを除くクラスの残りの人たちにとっても、時間無制限のテストをするという問題点が解消されるということになる。

なぜなら、他の授業は、私たちの授業が終わった15後に始まるため、私には使うオフィスがなかった。私たちは、朝7:30にインクラステストを始めることにした。そして私たちは、この開始時間を利用しようとする学生は誰であっても、この時間を利用可能なものとした。

私は、最終の2つの試験において、学生が自由なレスポンス（エッセイを書くこと）をとることができる選択問題を出題するか、あるいは多肢選択式で出題するか、×式での問題を出題するかに決めた。私は、このような方法をとることで、フランクが2つの試験をざっと解くことができると信じた。そして私は、彼がどちらかのテストによって最良の成果を引き出せるのではないかということでこの方法に決定した。すべての学生がみな同じ選択をしたため、表現の方法を選ぶ機会では、個人的にフランクを不利にするものとはならなかった。

さらに、私たちは権利擁護の問題について話した。フランクは、自分に対して何が提供できるのかをたずねることから、自分の学習ニーズを満足するために何が必要かを講師に知らせるまで、どのようにしたらよいのかである。学期が過ぎるにつれて、私たちは、彼が彼の学習を妨害したと考えている家族問題にまで話の幅を広げた。そして学期の終わりまでに、私は、彼が家族の支援の必要性についてより断定的になったと思っている。

フランクは、学習障害をもつ多くの学生の中で、その学期に私に学習障害の病歴情報を共有した最初の学生であった。

私は、学期の中で多くの学生と学習病歴について情報を共有した。しかし私にとっては、授業で彼らの可能性を成功に導くのに必要であると思われるステップのいくつかを踏むにはあまりにも遅かった。フランクに対して行った独創的な配慮は、授業を履修している多くの学生のやる気を高揚させた。しかしながら私は、配慮を理解する若者ためにもっとやることができたらと思う。そして面白い才能とともに彼にした配慮を個人生活に関係づけることができたらと思う。残念ながら私は、さらなる概念化を図ることができなかった。彼の最終的な論文とプレゼンテーションには“脳に関して常に知りたかったすべて、しかし尋ねることをためらってしまうこと”と題したものであった。その論文講演は、ガードナーの7つの知能の1つまたは2つ以上が認められないという知見で“他の人たちと違っていること”そして“愚かなこと”と見られてしまうことをどのように感じるのかという感銘的な演説であった

フランクにもどって言うと、彼はそのコースを苦しみながらもBマイナスという成績でパスした。この成績は、この期間における彼の理解しようとする力や努力による学習、および彼の生活への適用能力からみれば現実的なランクであった。私は、彼がフロイトやエリクソン、スキナーあるいは他の人に関する理論がどのように作用するのか、それを理解する以上に、コースを卒業していくことを望んでいる。私は、学問的な教育課程を修めることで自分の才能を伸ばし、自分自身を支持できる一人として同様に学習者として自分自身を評価してコースを卒業することを望んでいる。

教職員として、特にパートタイムの学生を扱う教職員として、教えるすべての学生を目標に到達させることは難しいことである。また組織の中では、しばしば学習者としてあまりよく思われない彼ら自身に価値あるものを与えようとすることは大変なことである。たとえば、この体験談ではフランクという学生を例に出したが、もし私たちがどんな小さな

配慮でも喜んでしようとするならば、私たちは、彼ら自身の学習がよりうまくいくよう押し量る力を与えることができる。また、彼らの生活においての学問的な分野、そうでない分野における成果を押し量ることで学生たちに力を与えることができる。

テキストにマークする：集中力、理解力、持続力向上への支援

by Verdery B. Kennedy

サラは、基礎リーディング授業で教室の4分の3の後部座席に座った。彼女は、怒っているような、挑戦的なそしてすごくみすばらしく見えた。彼女は、最初の授業セッションを通して私をにらみつけていた。それは悪い状態で誰かに対して「何かをするような」むきだしのつかかりをもっていた。私は、通常、学生たちの能力を見極める時間である最初のテストを行う前までは、学生と相談をすることはなかった。しかしこの場合、明らかに緊急を要する行動であると判断した。彼女は、今にも爆発しそうに見えた。

私のオフィスでの長い会話は、爆発するというよりもむしろフラストレーションで泣き、苦痛を取り除く結果となった。サラは、読むことが大嫌いであることを告白してきた。そして大学は、高校時代よりももっと苛立たしいものであるということがわかったと。高校では、スポーツへの活発な関与で、勉強の退屈を解消したのであった。彼女は読む学習、特に早期の基本的な学習過程の中でゲームやスキットを楽しむこと、そして計画を描くことにおいて生まれつき問題を抱えていた。彼女は指定した短い箇所を読むことには問題はなかった。とくに彼女は1枚の紙あるいは指を使って目で追いながら読むことには問題なかった。彼女は、リーディングアサインメントが長くなった中学校時代から読むことが嫌いになりはじめた。彼女は、長い授業時間を座っていることを嫌った。そして大抵、読書のセッションの受講をやめ、しばしばキッチンか外で遊んで時間を費やした。中学時代のこの時期に、彼女は、読む時に指で指し示すことで注意力を集中するという、彼女にとっての支えを捨てるよう強要されたのである。彼女は、高校に入学するまで、はリーディングアサインメントと同様に、クラス中で授業に集中することへの問題を抱えていた。このため、ほとんどの授業で彼女は、授業時間にはしっかり席についているように要求されたのである。彼女の成績は、多く読書を要求する授業においてよくなかった。しかし彼女は、クラスメートのノートをコピーすることによって、彼女の部屋の中を行ったり来たりすることによって学習内容を暗記するようになった。彼女の口頭によるSATのテストの得点は低かったが、彼女は大学に補欠で入学できるほどに十分にうまくやったのである。

第1期、発達学3つの分野すべてで、彼女は作文と同様に数学も成功をおさめた。というのは、論文はリーディングアサインメントというよりもむしろ彼女の個人的な経験に基づくものであった。彼女は、特に授業外で論文を書くことで成功をおさめたのである。その成功は、実際のところ書くときだけ座り、行ったり来たり歩くことで頭を働かせることができたのである。実際、彼女は、論文を授業外でやることで大変うまくやったので、講師は彼女の公正さを質問した。彼女は現在、基礎リーディングの第3期にいる。そして彼女は、文学上の分析論文を要求する英語のコースと戦っている。彼女は、数学の授業はBの成績でパスしたが、歴史と心理学はそれぞれFとDで不合格であった。彼女は時間制限

のある、標準的なテストであるリーディングの最終試験において、試験に合格する得点をつくらうにもどこにも作れなかった。彼女は、自分は知的であると確信していた。しかし彼女は、どこか調子が悪いのではないかと心配した。というのは、リーディングアサインメントに集中できなかつただけではなく、彼女が読んだものの多くを思い出すことができなかつたのである。

サラとの会話で、彼女が理路整然としており、かつ知的であることが明らかになった。個別の質問で、彼女は、学習障害のための診断が決してされることがなかつた、あるいはまたテストされることがなかつたことも明らかになった。しかし彼女は、中学時代に治療のためのリーディングクラスにいたのである。私の最初の答は、どのようなLD(学習障害)であるかの診断のために彼女をテストセンターに差し向けることであつた。しかし順番を長く待たなければならなかつた。

私はサラとともに基礎学習クラスの第3期に入っていた。私は、テスト結果を待つことができなかつた。そこで私は、以前の春の会議で取り上げられた学習スタイルに関する詳細を参考にすることにした。予想どおり、サラのスコアは、筋運動感覚/触覚の学習者であることを示していた。それは視覚的かつ聴覚の両面において異常の型であつた。集中力、理解力および記憶保持に関する彼女の問題は、おそらく学習ストラテジーの使い方に誤りによって引き起こされたものである。その誤つた学習ストラテジーは、彼女の学習スタイルを支えてきた主となるものであつた。

最近モーティマー・アドラーの古典的記事を再読した。その本は“ How to Mark a Book”である。この本は、学習スタイルやリーディングの研究および研究技術テキストについてのいくつかの事項を調査したものが加えられており、それらは、多くの学習スタイルを支えるストラテジーについて提唱したものであつた。私はサラに、彼女の集中力、理解力および記憶力を増強する筋運動感覚ストラテジーを教え始めた。第一歩は彼女の背中に「支え」をすることであつた。この時、彼女の指あるいは紙の代わりにペンか鉛筆をもつような方式をとつた。彼女は、初めこのアプローチに抵抗した。というのは、彼女は「支え」が幼児的であり間違っているという考えを徹底的に教えられていたからである。このため彼女が支えを使用するようになるには、数日かかつた。彼女は、本を読んでいる間、肉体的活動の必要性もあつて支え使うと、少なくとも部分的には満足を得、落ち着きを取り戻し、そして集中力をもって本にマークすることができるという結果をすぐに理解した。さらに彼女は、本を読む速さが全体的に増しきっていることがわかり、結果として、本の難易度に応じて本を読む速度を上げたり、落したりという読書割合の自己制御ができることも発見したのである。

次のステップとしては、サラにテキストにマークするより効果的な方法を教えることであつた。その方法は、本を読む過程において肉体的なかわりと同様に精神的な活動を通して集中力をさらに増加させるものであつた。大学に入る前まで、ほとんどの学生たちは学校に通っている。学校では、テキストにマークすることは厳しく禁じられている。サラの経験では、この規則に例外はないということであつた。この、本にマークすることを禁じることは、良くないことである。というのは、研究結果から、テキストにマークすることが理解力および持続力の両方にとって最も有効なストラテジーの一つであることを示しているからである。筋運動感覚/触覚異常障害をもつ学習者にとっては、学習のためにこ

のストラテジーを使用することは健常の学生たち以上に不可欠かもしれない。学習障害をもつ多くの学生たちは、筋運動感覚/触覚異常障害を抱えており、彼らにテキストにマークすることを当然のこととして教えるべきである。サラは、テキストにマークすることで恩恵を早期にこうむっている。これには、次のようなことがある。

- 1．本にマークすることは、与えられた学習課題において、手に注意を向ける。それによって集中力を高める非常に貴重な支援となった。
- 2．本を読む過程に含まれる、マークをする箇所の決定とまとめるという行動をし続けるということで理解力を高めた。彼女は、学習教材をまとめていくために、重要であるかないかを容易に認識できる箇所とそうでない箇所、そしてお互いが関連しあっている箇所の何をどのようにマークすべきか判断しなければならなかった。
- 3．簡単なフィードバックを行った。というのは、もし彼女がどのようにマークすべきかを判断できなければ、彼女は、再読や手助けなくして学習教材を理解できないということをも自分自身わかっていたのである。
- 4．彼女が学習すべき情報の骨格となるアウトラインを提示した。これによって復習するための時間が節約できた。過去において、サラには、記憶するまでテキストおよびノートを再読しようとしていたことがあった。この途方もなく時間を消費する学習は、持続力をすこなくしてしまう結果となった。テキストにマークすることは、他方では、コースの要点について学習したり復習したりする時間を費やすことを可能にした。

本をマークする過程において、私は、サラに次のようなことを含めて教えた。

学習教材が与えられた時、主となる考え方の各セクションあるいはパラグラフのトピックが主題を“強調して塗りなさい”。さらに、彼女は、重要な用語を塗って強調したり箱型に囲んだりした。これら行動は、コースの概要やテスト問題の概要を顕著に表すことになる。

詳細記述を補充する主な事項に“アンダーラインを引きなさい”。これらはテストの答になる。

文を転調させる言葉や際立った言葉を“丸く囲みなさい”。結果のような、たとえば、一方ではなどという言葉がそうである。

理解できなかった定義や例、回答可能な試験問題および項目に“ラベルを付けなさい”。

リストアップした項目に“番号づけをきなさい”。著者が順番どおりに項目に1、2、・・・最後に、その他と番号づけするように。彼女は、これらの際立った言葉を単に丸く囲んだ。しかしながら、しばしばこれらの際立った言葉が存在しないこともあった。そこで彼女は、小さな円で囲まれた数字をつけ加えることにした。項目に番号が付けられた後、彼女は標題に番号を加えるか、あるいはまた余白に標題を書くようにした。たとえば“(6)Causes of Bubonic Plague”のように。

私は、彼女が本を読むこと、そしてSQ3Rシステム(Frances P. Robinsonによって開発されたシステム)にしたがってのマーク付けで指導のための質問をするように促した。そして本にマークする前に、節や段落を読むにあたっての質問をするように彼女に促した。マークをする人たちは、マークにすこく頼る傾向がある。私は、彼女が自分がわかるマー

クである記号を作り出し、コースからコースへ彼女のマークを一貫して使用するよう彼女に助言した。彼女は、かつて実行可能なシステムを作り出した。そのシステムは、彼女が読もうとするほとんどにほんの少しの修正をするだけで使えることもわかった。彼女は、アサインメント終了後、明らかに重要なすべてのキーポイントを確かめるために、彼女がマークしたものをチェックした。

サラのための私の目標は、一見して理解できるものであった。

(1) 要点と要点を補充する詳細記述との相違

(2) 記述の性質と種類：比較／差異、例、定義、原因／結果、その他

(3) さまざまな考えとの関係

彼女は、4学期のすべてを新しい学習スキルで完全にやりとげた。そして新しいスキルを適用することを見出したのである。彼女は、彼女の学校経歴の中で規定時間以上に集中して読むことができたのは、はじめてのことである。彼女は読んでいることを理解し、そして大きな喜びを得、彼女が何を讀んだか覚えていることができたのも初めてのことである。彼女は、時間内に読むことに関しての集中力の能力の向上と、読むスピードの向上によって、標準時間で単位取得試験に合格することができた。彼女は、基礎リーディングの授業の第3学期は、Aで合格した。英語の授業はC、そして彼女が再履修した歴史はBであった。学習障害のふるいわけでサラの結果は、学期の終了近くにやってきた。そのふるいわけの結果、サラは、教室の中にいる間、および本を読んでいる間、筋運動感覚/触覚障害のストラテジーを使用することによってコントロールできるほどの非常に軽い注意力欠如障害を持っていることが明らかになった。1991年、サラはジョージア・サザン大学の幼児教育課程を卒業した。彼女は、彼女のもつ学生個々の学習スタイルに教育方法を合わせていこうとした。また彼女が受け持つ筋運動感覚/触覚障害をもつ学生たちすべてに支えを使うことを薦めた。私は、サラとともに経験し、多くのことを学んだ。そして今、私はすべての私の学生に、学生個々の学習スタイルを支援する学習法を教えている。

カトリーナのケース：テスト恐怖症と使いやすい設備

by Sari Rosenheck

私のライティングのクラスにカトリーナという名の成人した学生がいた。彼女はシングルマザーで教育を受ける機会に恵まれず、そのためか学ぶ方法を知らず、試験になると極端に緊張する性質があった。

カトリーナはまじめな学生で私に継続的に補習をしてくれないか、何時間でも頑張るからとやってきた。彼女の学習意欲は宿題やレポート、成績からは全く想像できないものがあった。

カトリーナのレポートはひどいものだった。思考の論理がバラバラでほとんど理解できなかったし、文法や句読点などないものも同然だった。私たちの接点になったのは週に1回の課題だった。

私は毎週水曜日にクラス全員に同じような課題を出していた。それは単語10語と1つ

の引用文で、引用文には必ずパラグラフ2個使ってコメントをつけることになっていた。毎週水曜日の授業はカトリーナにとって涙の出るほどつらいものだった。単語の学習に何時間もかけ、引用文については「頭には浮かんでいるのに文字にならないのよ！」とつらさをぶちまけていた。

ある課題をやった後、カトリーナはひどく落ち込んでいたが、私はいつもと違うことをやってみようとして提案した。私は彼女を連れて学習センターへ戻るとすぐ学習室に行った。私は彼女に、もし課題ができなかったと思っているのなら、もう失うものはないはずだと言った。それから静かにプレッシャーを与えないように、課題の単語の意味だけでいいから教えてくれるように言った。エッセーでも同じことをやった。試験の時間に文章を書くのではなく、エッセーを「語る」ことを教えたのである。

最初から上手に答えることができたわけではないが、少なくとも自分の声を聞き取れるようになった。すると次には自分で修正することができるようになった。カトリーナに自分で語らせ、こちらの望む結果を強要しないようにしたことで彼女は正解にたどり着いたのだった。

これだ、と思った。私のクラスはライティングのクラスであるが、時々口頭で課題を与える。ほんの一、二回で学生たちはどうすればいいか理解する。この方法はESLのクラスでも使えるかもしれない。一度口頭で試験した後は笑顔で「この間と同じよ、いい？」と聞いてやるだけで学生たちはリラックスして前回の成功体験を思い出す。

カトリーナは自分でテスト恐怖症であることを知っていた。ただ、それがコントロール可能であることに気づいていなかっただけである。(課題がうまくできないという)最悪のケースを克服し、自力でやっていけることを教えてあげるだけで立ち直ることができた。カトリーナはCLA(学習補助センター)が提供するテスト恐怖症や学習法に関するワークショップにも参加していた。

カトリーナとのこのわずかな体験は世界に衝撃を与えたわけでもないし、彼女の人生を大きく変えたわけでもない。でも学習努力が無駄ではなかったことを彼女に教えることができた。事実、カトリーナには学習能力があったのだが。もう一つ彼女が気づいたことがある。それは利用者の使いやすい設備さえあれば必要な情報を自分で集めることができるということである。

そしてなによりも、私たち教育者にとって最も大切なこと、すなわち、どんな人でも学習したり試験を受けたりできるということ、そしてその方法は様々であっても最後には学習できるのだ、ということにカトリーナが気づいたことこそすばらしいことである。

リンダに数学を理解させるストラテジー

by Karyn L.Schulz

リンダはOSS(Office of Special Services)を通して私のところに来た学生である。彼女のカウンセラーであるLDS(Learning Disabilities Specialist: 学習障害者専門士)によれば、彼女は、基礎算術計算部分の数学教育が必要であるとのことだった。作業に取りかかる前に彼女に関する書類に目を通していて、ある重要な情報に気づいた。書類はこ

の学生の高校から送られてきたもので、内容は最新の心理教育テストに関するものだった。この書類はサポートサービスを受けるのに必ず必要である。リンダはADD（注意欠陥障害）による学習障害であると診断されたと連絡を受けていた。リンダは、小学校の頃から特別授業を受けていた。連絡文書にはマナーも良く、付き合いやすい学生であると記されていたし、私もリンダの指導を楽しみにしていた。

リンダはエセックス・コミュニティ・カレッジへの入学に際して実施されたプレースメントテストの結果、基礎算術計算クラスに入れられた。プレースメントテストは学生が一年次に配属される際、学習に支障のないよう適正なレベルの数学クラスを決定するために各大学で作成されるものである。リンダはこのプレースメントテストの結果が低かったため、ただちに特別指導付きの基礎計算クラスに入れられた。彼女の障害は聞き取り能力、読み、書き、数学の分野で認められた。さらにリンダには、情緒障害と軽い精神障害の過去があり、医師のコメントにも過度の活発性ありと記されていた。

私はリンダに面接して彼女が何を必要としているのか、またどんな指導が適しているのか話し合うことにした。彼女は基礎計算と基礎の国語が遅れていると言った。一次面接ではノートの取り方、学習習慣、試験対策方法などについてチェックした。これまでの学習成果や間違い箇所についてかなり話し合った結果、この3つの点で能力がかなり低いことがわかった。

リンダが授業についていくためにはストラテジーが必要だった。彼女はもしそうしたストラテジーがあるならぜひやってみたいと思っていたが、同時に克服すべき障壁があることにも気づいていた。障壁とは、自分に自信がないことや講師が教材をどんどん発展させていくことなどだった。高校時代同様、大学入学後も学習が習慣として身に付いてはいなかった。

私は彼女にどうやって算術計算の勉強をしているのか見せてもらうことにした。すると彼女はテキストを開けても読み始めない。ただ読むだけである。この方法は、明らかに効果がないし、計算能力の向上には適していない。そこで私たちは計算の習得が学生には難しいものだとして、学習方法に関するアイデアをブレインストーミングすることにした。リンダは分数でずいぶん苦労していた。分数計算を実行する手順を理解していなかったのである。私は次のように指導した。

- 1．等しい分数を計算するステップをテープレコーダーに録音して、行き詰まったらテープを聴く。
- 2．参照できる問題例を書いた学習シートを作る。例えば
$$a / c \times b / d = a b / c d$$
これに数字を当てはめて結果が同じかどうか確かめる。
- 3．私が勧める最も有効な学習方法はただひたすら計算練習をすることである。これによってリンダは計算とは当てはめることであると気づき、納得した。
- 4．インデックスカードを用意し、片面に計算ルールを、もう片面にそのルールの適用例を書いておく。スペースに余裕のある4×6インチのカードをすすめた。家庭での支援体制は、強力であり、フラッシュカードのことなら何でも聞いて欲しいというま

でになった。

リンダはこれらの方法を実践し始め、それなりに効果も出た。しかし分数に関しては、はかばかしくなかった。算術計算練習を繰り返すことで学習習慣については自信をつけ始めていたし、進歩もしていた。彼女は、この方法で学習するようになってから間違ったところも間違わなかったところも同じように意識するようになったと言った。

もう一つリンダが心配していたのが計算の試験であった。試験用紙の片面を埋めた問題の量を見ただけで恐怖感を覚えるのだそうだ。大量の問題が同時に自分の方を向いているだけで圧倒され緊張してしまうのだ。私はこの問題について事態を何とか打開しようとしているもう一人の講師と議論を交わした。私は、学生が個々の問題にもっと集中できるよう試験用紙の上に問題を「ブロック化」してはどうかと提案した。その教師は、このアイデアに賛成し試験用紙を作りかえたが、リンダには効果がなかった。現在問題用紙は一問一問が固まりになるようブロック化されるようになったが、リンダは問題用紙に書かれた問題の多さに圧倒されてしまうのだ。私はさらに、試験中は解いている問題以外の問題を白紙で隠してその問題に集中できるようにしたらどうかと提案した。この白紙は、注意が散漫になるのを防ぎ、注意を解こうとする問題に集中させることになり、彼女にとって試験に成功するための必須のツールとなった。リンダは、この方法を他の試験でも同様に使い始めた。

私たちは学期の終わりまで算術計算の研究を続け、その後基礎リーディングに移った。計算の時に使ったテクニックの多くはここでも役に立った。ポキャプラリーでも文法でも句読法でもルールの学習にフラッシュカードを使った。リンダは能力の多くがカードのおかげで向上したと思っている。私は、教材の繰り返し練習が記憶能力を向上させ、同時にマルチ感覚を使った自力学習ツールになったのだと説明した。書きながら音読することで視覚と聴覚を使い、鉛筆やカードに触れることで触覚を使っていたのだ。リンダはここでも試験の時はブロッキングテクニックを使った。リーディングのテストはブロック化が標準となり、以前のうっとうしいやり方には戻れなくなった。リンダは前後の問題を白紙で覆うことを覚えてから問題に集中できるようになり、問題量に気合い負けすることはなくなった。リーディング能力は学期の終わりまで進歩を続け、コースを十分な成績で終了することができた。

リンダは基礎計算もリーディングもパスすることができ、次の学期には幾何にもエントリーして自分を誇りに感ずることができるようになった。学校で算術計算以上のレベルに達したのはこれまでなかったことで、大きく自信をつけることができた。職場周辺でもたくさんの友達ができ、しかも彼女の成功を誰もが知るようになった。しかし、一年後、リンダはエセックスには戻らなかった。実社会で働くことでもっと自分を深め、自分の可能性を広げたいと思うようになった。リンダは今でも連絡をくれるが、あのときの決断は間違っていなかったと実感しているとのことである。

リンダの指導は私にとっても得るところが多かった。彼女の、成功したいという熱意の強さはすごいものがあつた。学問的にも人間的にもその成長ぶりには報われる思いであつた。リンダと私は、ともに学び、笑い、そして涙したのだ。

学習障害を持つ学生に対する作文教育にカセットテープレコーダーを使いこなす

by Nancy A.Stricklin

短期大学で1年間英語を教えてすぐ気づいたことがある。それは、新しい価値観を持った学生に従来の教授法と成績評価を適用しても思ったような効果が得られないということであった。特に、昼間フルタイムで仕事をしていて充分に出席できない学生、しかも個別相談にも参加できないことが多い学生をどのようにサポートすべきかという問題には常に悩まされてきた。この問題を解決するために、私は出席できなかった講義をもう一度聴けるように、また提出物に対する評価を音声で聴けるように、テープを使う方法を大幅に取り入れることにした。

学期の始めに、私は自分用に大量のテープを購入し、学生にも各自1本ずつ購入して指定の課題を吹き込んで提出するのに使うよう指示した。次に、授業に出られなくてもテープを聴けるよう授業内容を録音する計画であること、また提出されたテープで作文を評価することを説明した。作文の評価には状況に応じて3つの方法のどれかを採用することを考えていた。すなわち、総合(ホリスティック)評価法、標準評価法(成績の重み付け評価とコメント記入票)およびテープ録音法(コメント記入票と音声コメント)である。

学期の授業が進むにつれてテープ録音法に対する好意的な反応は急激に高まっていった。そしてこの方法を使いながら、私はこの録音法は別の応用した使い方もあることを見出すことができた。特に、学習障害のあると診断された学生に適用できる使い方に気がつき始めていた。そうするうちに私は、テープを授業の録音や作文の評価だけでなく、主として学習障害のために、作文の中でも主としてある特定の部分だけに困難さを示す学生のために特別な音声訓練課題を用意するようになった。夏の間この方法を続けていた。1回目のクラス全員面接が終わる頃ひとりの女子学生がやってきて私にアドバイスを求めた。彼女は、高校の時、ADD(注意欠陥障害)との診断を受けており、何でもよいから指導なりアドバイスなりしてもらえないかということであった。ADDを持った学生に関する文献はザッと目を通しただけだが、それでもこの学生にとって授業に50分集中するのめたいへんであることがわかった。さらに彼女には通常のアプローチ以外に、講義、個人指導、学生同士の相互交流などが必要であることにも気がついた。障害について学生と話し合ううち、私はテープが当初考えていたよりもっと別の面でも効果があるのではないかと考えるようになった。そして私のその考えは間違っていなかった。結局テープは、学生の能力・やる気と相まってライティングにおいて驚異的な進歩を実現することになったのである。

彼女にとってテープは計り知れない価値を持っていた。なぜならテープがあれば自分の望むペースで、しかも何度でも授業を繰り返し聴くことができたからであり、さらに、テープのおかげで紙に書いた私のコメント以外に作文に関する問題点を知る方法を見つけたからである。特に作文上の大きな問題点であった「カンマ結合」に気づき、事実上克服してしまうのに効果があった。

総合的に見て、この学生は文法や身体的問題のほとんどない、作文能力の高い学生であったが、間違ったカンマ結合のおかげで意味不明になっていた。私の手書きのコメントも文法の指導書の自力学習も問題の解決には役に立たなかった。ところが成績評価のため学生がレポートを提出する直前の授業で、またその後内容を見直す過程で私と二人でレポー

トを音読してみたところ、カンマ結合に気づき、自分で訂正するケースがそれまでより高くなった。ただし、校正や修正から私が抜けてしまうと、1ページに3カ所もカンマ結合の間違いをすることもあった。

そしてまもなく、作文を読み上げ、耳で聞くことによって、ひとつのまとまった考えがどこで完結し、また新たな考えがスタートしているのかを自分で見つけられるということが私にも学生にも見えてきた。この時点で私たちは、作文を音読してテープに録音し再生することで、一つの文章がどこで終わり、次の文が始まるのか、学生自身で聞き取れるようにすることが大きな効果をもたらすという結論に達した。確かに時間のかかる方法ではあるし、もし学生自身にライティング能力を向上させたいという意欲がなければおそらく成功しないだろうと思われる。しかしながら、この方法と学生自身の努力によって、彼女の最終原稿は短時間のうちにカンマ結合のほとんどないものに仕上がったのである。

この方法には非常に時間がかかるため、この学生の作文課題には余分に猶予を与えることも多かった。結果は学生にも私にも充分満足のいくものであった。学期終了までに彼女のカンマ結合は1ページ3カ所から原稿全体で1、2個まで減っていた。

この方法に関しては彼女自身のコメントが最大の説得力をもつといえる。「テープという手段がなかったらライティング能力を向上させたいという気にもならなかったでしょう。文体や文章表現の多様さ、表現力のある語やフレーズなどの向上にテープはとても効果があった。」

学生のための教育的な配慮

注意力、集中力、あるいは記憶力に欠ける学生のために

講義のアウトラインを提供する

テストのために別な場所を提供する

筆記のための代理人あるいはノートテイカーを利用する

テスト時間を延長する

小テストを続ける

講義をテープに録音する

座る位置を配慮する

計算機を利用する

社会的な行動に異常のある学生、 あるいは一貫した行動に困難をともなう学生を教える

社会的な行動に異常のある学生は、衝動的に行動をすることもあるし、また、一貫した行動が困難であったり、約束をなかなか守れなかったりすることもある。

一般に関連する障害と症状

薬物乱用

精神障害

トゥレット症候群

学習障害

てんかん発作障害

頭部外傷

侵食性紅斑性潰瘍

障害をもつ学生とよいコミュニケーションを築くことは、その学生を成功に導く基本である。衝動的に行動するあるいは一貫した行動に困難をともなう学生とともに、よく考え、話し合うべき事柄として以下のような質問リストがある。

1. その学生は授業のディスカッションに参加しているか？はっきりと発言するのに、筆記テストでは、成績が芳しくないか？その学生の知識を正確にテストしていると、どのようにして私は確かめることができるのか？
2. その学生は、大切な事柄を強調する時の私の声の調子や身振りを誤解したり、うまく理解できたりしていないのではないか？
3. その学生は不安や疲労、無関心、落ち着きがないように見えないか？それはいつ生じるように思えるか？
4. その学生は不適切な時に話をしたり、大声で話したり、失礼な話し方をしたり、近すぎる所に立ったり、会話をさえぎったりしないか？そういうことが起きて授業が混乱したとしても、どんな時ならそれを見過ごしていいのか、また、どんなときならきちんと対処しなければならないのか？
5. 試験を受けるというストレスによって、その学生が（テスト問題を）理解しづらくなっているのではないか？時間の延長は適切なのか？試験場を変えるのは問題なのか？

数学の学習障害をもつ学生への支援

by Katherrine W.Creey

ラッセルは、公立の学校で教育を受けている間、特別教育クラスにいた重度の学習障害をもつ学生であった。高校では、特別指導教室にかよう学生で、特別教育の教員のもとで、

数学と英語の授業を受けていた。彼は代数以外の全ての科目に対するコピーング・ストラテジーを学び、高校の4年間にそのやり方で過してきた。

訳者注：コピーングとは、現実のストレスに対しての反応の仕方の中で、コピーングストラテジーとは、授業などの不安にうまく対処するために使う対処法である。たとえばよくなろうと一生懸命に勉強したり、自分を落ち着かせる行動をとったり、出来のいい自分を想像したり、あるいは自分の不安をうまくコントロールできていない友人を探して授業を理解しているかなど尋ねる行動などである。

ラッセルは、障害学生担当オフィスから彼の障害と彼が授業を受けてうまくいくための必要な配慮が載っている書類を持ってきた。その書類には、前の席に座ること、個室で試験を行うための時間延長を認めること、授業での講義をテープで録音することが書かれていた。それには、彼がどのような学習障害であるのかに関する情報、そして、彼が高校で4回、大学で2回、この科目の授業を試してみたことは書かれていなかった。

私は、彼を最前列に座らせたので、彼は黒板がよく見えるうえに、授業中に他の学生によって気が散ることもなかった。彼は授業を録音しても役に立たない、というのも、もう一度聞いても彼にはわからないからだ、と言った。私は彼に私の研究室で話をしようと言ってみた。

彼は約束をしないことや約束を守らないことに対していつも言い訳をした。彼は最初の章の試験をCで合格した。しかし、第2回目、第3回目の試験は不合格だった。3回目のテストの後、彼は私に会いに来た。

私達のミーティングは、なぜ私が彼を助けることが出来ないのかについて彼が述べることで、始まった。彼にとって代数は意味がないから、代数ができないのだと言った。また、おのおのどの先生も彼に代数をうまく教える方法があると思っているのだといった。ところが実のところ、それぞれの先生は、代数が出来るようになる新しいやり方を彼にやらせようとして、彼はますます混乱してしまった。

彼がしていたことはうまくいかなかったのだから、私といっしょにがんばってみても失うものはなにもないことを私は指摘した。私達は歩み寄った - 彼はとりあえず1週間私の提案を試してみることにした。私はすでに彼が前に受けたテストを分析していた。そして、彼にとって代数は意味がないが、計算は意味があると彼が話すのを耳にしていた。彼には異なった記号や数、文字の区別ができないと私は感じていた。

はしばしば妥協が必要である。)

私はまず代数の問題を白い普通の紙に写した。ただし、それぞれの項と記号の間に大き目のスペースをあけた。これは少し効果があった。それからそれを再び罫線のない紙に写した。今回はその問題を大きな文字で書いてみた。これはもう少し効果があった。それから、太い赤のマーカーを使い、 $=$ の記号をマークして、もう一度、その記号の使い方を説明した。今回ははっきりと進歩が見て取れた。しかし、彼はプラスの記号とマイナスの記号を誤解していた。まるでマイナスの記号は紙にないかのようであった。私は太い青のマーカーを使い、マイナスの記号をマークした。今度彼が問題をといてみると、正解にかなり近づいた。次に私は黄色の罫線のない紙を用意して、「 $=$ 」の記号は赤で、「 $-$ 」の記号は青

にして大きな文字で問題を書いてみた。彼は正しく問題を解くことができた。そして、違った記号のついた項を左辺と右辺にもつ等式について私が言おうとしていたことが彼には理解できたと言った。

彼が宿題を始める前に、文房具屋さんへ行って違ったパステルカラーの紙を何枚か買うように頼んだ。彼は私達がした上のようなやり方で宿題をすることになっていた。次に授業で会った時に、彼は淡い灰色の紙がとても効果があると私に言った。学期が進むにつれて、マーカーをつける部分を変えていった。考え方として大切なことは、太字でマークするのに彼が必要なことをはっきりさせることであった。

ラッセルは克服しなければならないもう一つの問題を抱えていた。彼は教科書から数学の問題を正確に書き写すことができなかった。いくつかの方法を試してみても、私達は単純な解決方法を思いついた。それは、彼が書き写そうとする前に、その問題の前と後に付箋紙を貼るというものであった。こうすることによって、彼は書き写そうとしている問題と別の問題を見間違ふことがなくなった。このやり方は本に載っている解答の場合にも用いられた。彼は別の付箋紙を使って解答のページにマークした。彼は付箋紙がちょっとだけ見えるようにページの上に貼った。付箋紙が数週間そのままであることに気が付いたのである。

彼の(日頃の)テストと最終試験は、問題用紙1枚に、1問か2問しか問題を載せず、しかも大きな活字で印刷された。タイプの部分を除けば、問題は異なったインクで書かれた。したがって、問題の部分は彼が解答した部分とすぐに区別をつけることができた。全部書き出すと問題が長くなってしまう場合には紙を折り返し、うまくはまるようになっていた。彼はテスト用の色のついた紙を持参して、色つきのマーカーで記号をマークすることは彼自身がすべきことであった。

黒板で問題を解く時、その解答の段階を強調するために私は2種類の色チョークを使った(このやり方がどんなに生徒の役に立ったかを数人の生徒から教えてもらった)。ラッセルは黒板から問題を書き写すことはできなかったが、個別指導教員に私が用いた方法を説明することができた。彼の個別指導員が同じ方法を用いてくれたので、ラッセルは異なった方法で混乱してしまうことはなかった。ラッセルに効果がある方法を発見するとすぐに、ラッセルと個別指導員と私の3人でミーティングを開いた。そのミーティングの時に、私がラッセルに何問か問題を解いてもらったので、個別指導員は彼がどのように問題をとくか実際に見ることができた。

ラッセルは次のテストでCをとり、最後の試験ではAをとった。最終試験には合格しなかったが、助けを求めて私の研修室に時には、履修過程の半分以上が終わっていたことを考えれば、大変よい成績だった。

ラッセルは次の学期に同じ授業をとった。そして、うまくいくことが確かめられていた全ての方法を用いて、(C+)で単位を取得した。彼は他の教員の代数を履修した。今まで扱ったことのある内容の場合にはよくできたが、代数の進度が速かったので、新しい内容にはついていくことができなかった。現在、彼はその科目を再履修していない。

ラッセルが重度の学習障害をもっていることを思い出してください。あなたの学生のほとんどは上で述べた提案のいくつかが必要なだけでしょ。まず、ひとつ始めてみて、ど

うなるかを良く見てください。そして、必要ならば他の手立てを付け加えてください。生徒の言うことに耳を傾けてください。そうすればかれらにとって何が有効であるか教えてくれるはずです。何回か試してみて、自分にとって有効であると彼らが思わない方法を決して押し付けしないで下さい。彼らはあなたに、学習障害の治療法のすべてを知っていると思っているもう一人の「知ったかぶりの先生」だとレッテルを貼るだけです。この方法は他の学習障害をもった学生にも、そして、学習障害と分類される程深刻ではない問題を抱えている学生にもうまくいっています。この方法の一番良い部分は、特別な設備もいらなし、教師に側に余分な負担がかかりすぎないことです。

薬物依存の学生を立ち直らせるよう努力すること。

by Joan Essic

ジェームズはアルコール中毒から立ち直りつつある43歳の大学生で、(短期)大学の2年生である。彼は4年間酒を飲んでいない。そして、1年半近くアルコール中毒救済協会(AA)で非常に精力的に活動し、その後、会合に参加するのをやめた。彼は職業リハビリサービスから照会されて、障害学生サービスへやってきた。彼は最初、自分は学業に対する動機付けと集中力に問題があるといっていた。質問をして、彼が落ち込んでいて、非常に孤立していることが明らかになった。彼は最初の面接の間、治療中であるとそれとなく言ったが、今抱えている問題はアルコール中毒とは関係ないとはっきり言った。

レズリーは22歳の女性で、(短期)大学の1年生で、コカイン中毒から立ち直りつつある。そして、彼女は学習障害がある。彼女はカウンセラーに非常に心を開き、コカイン中毒であったことや治療のために数年間学校から離れていたことを話した。彼女は社交的でとても活発で、酒を飲むと報告しているが、「たくさん飲まないし、飲むのは友達とだけだ」と言った。彼女の成績は芳しくなく、彼女はこれを付き合い第一で酒を飲んでいるためではなく、学習障害のためだと考えている。彼女は治療の後で、アルコール中患者救済協会と麻薬中毒患者救済協会(NA)のミーティングに数回出席したことを報告したが、「それは私向きじゃなかったわ。だって、もう、コカインもやってないし、やるつもりもないから」と言った。

マークはもう少し年をとっている30代後半の学生で、身体障害がある。彼は肉体的によりきつくない仕事に転職しようとして大学にもどってきた。彼は約8年間アルコール依存症の治療中であり、1週間に数回アルコール中患者救済協会に行っており、その12ステップ・プログラムに大変積極的である。彼は学業についてほとんど自信がなく、最近、受講中の4つの授業のうち3つでDやFをとっている。彼は集中して細かいことを覚えるのが大変だと報告している。彼はまた動機付けもあまりない。

この3つのケースは、今日私達が目にするのできる国中の障害学生サービスセンターにやってくる学生の典型的なタイプであり、また、そのような学生が大学側に提供する最初の情報の典型例でもある。504条が施行され、その対象として精神障害も含まれているので、アルコール中毒や薬物中毒から立ち直りつつある人は、他の精神障害の場合と同様に、私達のサービスを受ける権利がある。

薬物に対する関心がこの8年～10年で高まってきたので、ますます多くの人が治療を受け立ち直ろうと努力している。そういう人たちのうちで特に増えているのは若者で、大学生の年齢がもう少し下の人たちである。このような学生はアルコール、コカイン、コーク、ヘロイン、マリファナや他の薬物の中毒であったり、複数の薬物を乱用したり、複数の薬物中毒者であった場合もある。中毒はあらゆる社会階層、家族システム、人種に広がっている。

伝統的な大学の学齢である学生に加え、より年上の学生が大量に大学のキャンパスに戻ってきているのを私達は目にしている。彼らは、新しい教育を受け始めたり、教育課程を完成させたり、転職をするために大学に戻ってきている。このような学生の中には、立ち直りつつある学生もいて、その多くの学生が、10代前半から薬物を使っていたり、酒を飲んだりしていたという場合もある。彼らは伝統的な学齢の立ち直りつつある学生に共通する負担を背負っているだけでなく、薬物やアルコール摂取、そして、学生としての立場に影響を与える生活に関わる問題などの結果として生じた重度の社会適応力障害、身体障害や精神障害というさらなる困難も抱えていることもある。

このような学生に対処することが、学校のカウンセラーのほとんど毎日関わる仕事の一部分になることはさげられない。カウンセラーには、学生のためにアルコールや薬物に関係する問題についての基本的な教育が必要であるが、それは、このサブチャプターの範囲を超えるので触れない。ここで提案されることは、薬物乱用や薬物依存の問題が関係しているかどうか確かめるために最初の面接で学生に尋ねるべき重要な質問と、典型的な問題と問題解決のためのストラテジーである。

面接の際に、学生が酒を飲んだり、なんらかの薬物を使用したりしているかどうかたずねることが必要である。このことは、善悪の判断を決めるわけではないのであるから、非常にさりげなく行われなければならない。食事や眠る時の習慣をたずねたり、学生の生活全般について知ったりという文脈の時、そういう質問をきいてみるのもよい。その情報は守秘され、その学生に不利になるように用いることがないことを明確にしなければならない。もしよい関係が確立され、積極的に使用しておらず、回復傾向にあるならば、その学生は正直に答えてくれるのが普通である。

積極的に酒を飲んだり、薬物を使用したりしていると報告する学生に対しては、どんなものを、いつ、どれくらい使用しているか把握するように努めなさい。その答えは、少な目に報告されていると常に心に留めておきなさい。このような学生に対しては、薬物の選択、アルコールの量、それから、その使用によって学校の成績に悪影響が出ていないかどうかを自分で現実的に見るような手助けが必要である。彼らには、また、酒や薬物の影響についての教育が必要である。多くの学生が個人的にも成績に関しても問題を引き起こさないで社会生活において酒を飲んだり、薬物を使用したりしているのは事実である。また、かなりの数の人が、かなり酒を飲んだり、薬物を使用したりしても中毒にならないことは事実である。もっとも恐ろしいことは、アルコール依存症や薬物中毒は、治療せずに放って置くと、いつも致命的になることである。(完全なアルコール中毒になるには、早くて4年、長いときには30年かかることもある。コカインやクラックは2、3回使用しただけで、中毒になることが知られている)もしカウンセラーが学生の言っているパターンが(そして、それがあとになって酒や薬物の使用であることが明らかになれば)

学生の生活に成績の面でも、他のことに関してでも影響を与えていると判断したならば、しかるべき照会がなされなければならない。

中毒歴があり、もう使用していない学生に対して、大切なことで知らなければならないことが多くある。

1. どの位の間、摂取していないか？
2. どんな薬物をどれくらいの期間、どれくらいのレベルで、使用していたか？（私はたいてい、量と頻度をたずねる）
3. その人は、AA、NA、コカイン中毒患者救済協会（CAA）あるいは（もう一度）12ステップ・プログラムに積極的に参加しているか？
4. なんらかのカウンセリングを受けているか？
5. 回復過程において、学業成績に影響を与えるようなどんな問題を経験したか？

このような学生が報告したり、あるいは、カウンセラーが面接を継続していく中で気が付いたりする問題の中には、以下のようなものがある。

1. 衝動的な（強迫的）行動
2. うつ病
3. 孤立感
4. 怒り
5. 目をつけられているとか不当な扱いを受けているという気持ち
6. 他の中毒的な行動に逃避するという手段に訴えること
7. 他人を責めるような行為
8. モチベーションの欠乏
9. 年相応の処理能力の欠如と社会的スキルの欠如
10. 頑固で、白か黒かと割り切った単純な思考パターン

これらの問題はよくあることですか？もちろん、よくあることなのです。しかし、アルコールや他の薬物中毒を経験した学生にとっては、これらの問題にはすこし違った、あるいは変更を加えた戦略が必要になる。

回復途上にあるどんな人にも私がまずしようとすることは、12ステップ・プログラムに積極的に参加するように勧める事です。これに参加すれば、支援システムが提供され、教育が続けられるだけでなく、社会的交流のために安全な、つまり、薬物を使用しない仲間にもめぐり合える。また、それは、孤立する傾向にも歯止めをかける助けとなる。さらに、このグループによって、社会的なスキルを練習する安全な場所も提供される。参加を強制されることは通常ないが、参加するように常に強く励ましを受ける。また、私はこのような相談者を相手にする学校関係のどんなカウンセラーにも、参加自由のAAやNAのミーティングに何回か出席するよう強く希望する。そうすれば、そのような相談者がどんなことを行っているのかわかるからである。

私が学生と行うそれぞれのセッションの間、なんらかの形で、その依頼者がミーティン

グに参加しているか、そして、情緒がどうであるかの両方をチェックする。私はつねに以前に話された問題に対して注意している。(その中にはいわゆるドライ・ドラッグ・シンドロームの徴候がみられる場合もある。すなわち、本人は酒を飲んでいないのにアルコール中毒の気分や行動が全てあらわれてしまう状態のこと)もし、私がこういった問題が何らかの形であらわれていると気が付いたら、当人にどうしたのか、口頭でたずねることにしている。

中毒状態の時に作り出された行動や問題は、立ち直りつつある時に、奇跡的になくなったり、変化したりすることはない。本人が(まだ身につけていない社会的な、あるいは、人とうまくやっていくスキルのような)課題にもう一度取り組み、(強迫的な傾向や、怒りをぶちまけてしまったり、他人を非難してしまうなどの)行動を変化させるように努力し、雰囲気や感情をコントロールしたり、動機付けの欠如に対処するストラテジーを開発しなければならない。

学校のカウンセラーとは、多面性のある仕事である。セラピストではないが、学校に関わる問題に集中している時は、学生が勉強をうまくこなしていく能力に影響を与える問題を考慮しなければならない。うつや強迫感がひどくなったり、対処スキルが低下したりするというような問題が深刻になった時には、学生は治療のためにカウンセリングセンターに照会されるべきであるが、学校のカウンセラーは学生が毎日する勉強に関しても学生を助けるために利用できるストラテジーを持たなければならない。

ストラテジーの多くは重なっている部分もあり、いろいろな問題に用いられる。次のものは問題となっている特定の学生集団にもっとも有効であると私が気付いたものである。

1. うつ病

定期的に12ステップ・プログラムの集会に出席すること。1日ごとの具体的な行動計画。他の人(勉強仲間やクラブなど)との交流・係わり合いをもつこと。はっきり伝えること。楽しい気持ちにさせるような読み物や音楽。運動。リラックス。瞑想。短くてよく組織化された勉強。優先順位をつけたリスト。現実的な目標。

2. 怒り

カウンセラーと自由に話をする機会。日誌をつける。運動。衝動的な怒りを解放するように考案されたりリラックスするための方策。怒りを生産的に別の方向へ向けさせる方法を探すこと。現実とのすり合わせ。

3. 孤立感

うつを伴うことがよくある。12ステップ・プログラムの集会。他の人とのふれあいを含んだ具体的な計画。部屋からでること(すなわち、図書館の学習室とか他の人がまわりにいる場所へ行くこと)。一人で過す時間を制限すること(すなわち、午後10時までずっと部屋にいたりしてはいけない - 午前9時までには外出する)。なんからのプロジェクトを手伝うことにかかわる。(他の人に囲まれて勉強をしたりなんらかのグループ活動に毎日関わったりという計画はとても効果がある)

4. 他人を責めるような行為

こうした振舞いをする人とカウンセラーは親切に対面しなければならない。カウンセラーは、依頼者が現実をきちんと理解し、適切な行動のための境界を定められるようにな

る助けとならなければならない。「先生が悪いんだ。わかりづらいよ」という言葉は、
どういう情報が必要であるか、また、どのようにしてそれを求めたらよいのか、学生が
決められるように促す計画が将来必要であることを示している)

5．他の中毒行動に逃避する

学生がやりすぎていることを示す徴候に注意しなさい。(すなわち、私はある学生に毎日
一回リラックスする時間を取るよういった。その学生は3回その時間をとった。1週間
毎日それを「死に物狂いで」そうした。それから、力尽きて続けたくなくなった)立ち
直りつつある人はまるで「これが唯一の答えだ」というように行動する傾向があり、新
しいテクニックやストラテジーを熱心に追求し、やりすぎてしまい、元気がなくなって
しまう。彼らはほどよいペースで行うことを教わらねばならない。その事柄にもバラン
スをもって取り組みなさい。学業にだけ集中するのではなく、他の活動に対する時間も
含んでいる計画を立てなさい。柔軟性のある具体的な計画は非常に役に立つ(例えば、
明確に計画されているが、柔軟に交換できる時間の記録)また、以前中毒歴がある人は
別の薬物中毒になる危険性が高いことにも注意しなさい。

6．強迫的な行動

上の例と似ているが、この問題に関しては、柔軟性と「完璧でないこと」に耐えられる
能力に強調がおかれる。行動に制限を与えなさい。(毎日30分だけがんばりなさい。1
時間勉強したら、30分休みなさい。最初の下書きの場合は、つづりを直すためにいち
いち書くのを中断しなくてかまわない)

7．年齢相応のスキルの欠如。

この点において、人はなんらかの雰囲気をかえるような手立てをかなり用い、社会的な
そして、対処能力の進展は完全になくなってしまう。その結果、10代前半に薬物を使
い始めたり、酒を飲み始めたりする30代、40代の学生が、もう薬物には依存してい
ないが、仲間との付き合い方や標準的な大学のプレッシャーからくるストレスに対処し
ている時途方に暮れているというケースに出会う。こういうことに対処するストラテジー
やテクニックは、教育(あなたの先生に近づく時あなたがどんなボディラングイッチ
を使っているか見せてあげます。あなたに助けが必要であるって彼に知らせるどんな
ことをあなたは言ったのでしょうか?)や、ロール・プレイング、読み物を与えること、
少人数でのスキルの練習(多くの学習障害、身体障害の学生は社会的なスキルの欠如を
共有している)。などがあげられる。対処スキルは、状況に対処するいくつかの選択肢と
それぞれの結果について話し合うことを通して、そして、それと同じ方法でも教えられ
る。

8．モチベーションの欠如

目標を達成するためのとても具体的な計画。時間の記録。(しなければならぬ項目の数
には制限をつけた)優先順位の確立。目標をたてて、非常にこまかく細分化する。毎日
達成したことを振り返ること。褒美を組み入れておくこと。学生とカウンセラーで、ど
うしたらこの特定の授業や科目や計画に対してモチベーションが上がり、自暴自棄な行
動を減らせるかを探求すること。具体的であればあるほど、詳細であればあるほど、よ
い。

9．頑固で、白か黒かと割り切った単純な思考パタン

これは薬物中毒から立ち直りつつある学生に共通している問題では決してない。学生は複数の選択肢を作り出す方法を教えられ、いろいろな観点を認識しなければならない。私は学生の制限された考え方に揺さぶりを与えたり、学生にブレインストーミングのやり方を教えたり、他の人に相談して、いろいろな考えを集めたりするように促すといったようなストラテジーを用いて、いろいろな思考ができるように工夫している。

ここで述べたことは、問題となっている学生達が直面している特別な問題の全てに対処できるリストでは決してないが、共通の問題に対する意識の向上を促し、またそれに対処する方法をいくつかでも増やせることに役立てればと考えている。

注意力欠陥障害をもつ学生を助ける

by Paula A. Gills

リックが学習支援センターへ足を踏み入れた瞬間に彼が今までとは違った難問を（私達に）提供することになるとわかった。彼の独特な振る舞いは「度を越えて」おり、目を合わせることも難しく、言葉を介して簡単に意思疎通もできないし、彼のまわりには否定的な、なにか怒っている「空気」があり、よくあるように、特別な学校の活動が行われている「あの場所」にいることは不愉快であるようであった。彼が登録される前に受け取った（性格）判断レポートからは、その時観察したことは予想していなかった。そこに示されていたことは、軽いあいまい性の学習障害で、日常的には PL94-142 の状態なので、支援は必要ないというものであった。しかし、読み書きの達成度を測る数値から私にはっきりとわかったことは、彼の数値があまりに低いので最大限の支援がなければ大学での勉強をうまくこなすことができないということであった。また、彼の WISC-R の数値には私がよく知っているパターンがあらわれていることに気がついた。算数と、Digit Span、Digit Symbol の数値が比較的低く（これらの数値は部分的には注意力の指標となる）、その数値が示していることは、彼の学習スタイルには、恐らく、学習障害のレベルであると判断できる注意力散漫の可能性がかなり高いということであった。

はじめの話し合いでは、リックは自分の学習スタイルやそれに必要なことについて洞察することができなかった。そして、私の執拗な設問に多少敵意を持っているようであった。- 学業にも自分に関しても問題があるとは認めがらなかった。私は彼がそれまでとった授業のノートから彼の書いた物のいくつかをみたいと頼んだ。それはほとんど理解不可能で、彼の思考は混乱していた。彼は、担当の教授にいわれた英語のレポートに取り掛かっていたが、それもうまく理解できていない科目と同様の問題を示していた。私は時間管理と勉強のやり方に関するストラテジーについてたずねた。彼はそういったものを何一つ持っていなかったし、そういったことをどのように身につけ、実践するかについてまったくわからなかった。話している間、彼は絶えず落ち着きがなく衝動的な反応をするので、話を進めるのが困難になり、フラストレーションを高めることになった。私が専門家としてすぐに事態をコントロールし「改善」できないことに彼は不快感をますます高め、彼の怒りは爆発寸前のところまでいった。最後にはセッションをやめ、もう一度彼と会う約束を

した。

その間に、彼の母親に電話をし、高校1年性の時に受けた（性格）診断テストは彼の高校生活にはほとんど役に立たなかったことを知った。彼はほとんど一人で苦しんでいたのである。家族の問題、度重なる引越し、子どもの頃の事故で酸素不足の状態になったこと・リックについての母親との話の中で、こういった全ての要因が姿をあらわしてきた。そして、彼が大学での勉強についていくに非常に苦労していることを彼女が心配しており、息子は不幸な若者のように思っていることもわかった。まだ注意力欠陥障害だと診断されていないのだから（彼が ADHD の行動に典型的にあらわれる徴候をたくさん示していることは、はっきりしていた）、リックにさらに（性格）判断テストを受けさせるならば効果があることを、彼にわかってもらえるように説得してみようと私は母親にいった。彼女にはそうさせる方策がなかったが、リックの父親は何とかできそうだったので、彼に頼んでみると彼女はいった。結局、リックにもう一度（性格）診断テストを受ければ役に立つことを納得させるのに2年かかった。そして、本当に進歩が見られ始めたのは彼が3年になってからであった。こうして、学習支援センターではじめの2年間は、彼には介入と学校における継続的で強力な支援が必要であることについての断続的な激しい戦いのようなものであった。どこか心の奥で、彼は自分にはそういうものが必要だと気づいていたが、それを快く受け入れなかった。しかし、彼は定期的に、そして、いつも時間どおりにやってきた。このことは私には彼が最終的にはうまくいくという望みをもつ理由となっていた。

リックと私が最初に取り組まなければならないことは、彼の行動に関する問題であった。そして、それはある程度の注意力欠陥障害を伴うことがよくあった。セッションの間に生じる悪態やちょっとした怒りの爆発をどうすることもできないように、彼は自分の学習に対する態度を自分でチェックすることができないのだと、私は感じた。もう一人のチューターと私は「おだやかな（心を落ち着ける）」期間を彼に与えた。それは、彼が私達と快くやっていけるになるにつれて、状況が良くなっていくかどうかを理解するための期間であったが、彼の不満と怒りは高まり始めた。なぜならば、彼には自分の衝動と思考パターンをおさえることがほとんどできなかったからだ。私達はこの点のある程度解決するまではあまり進歩することができなかったが、リックはこのことを話し合うことに前向きではなかった - 正直に言えば、彼はそういったことを自分の中に見出していなかった。ある日、彼の不満がつわり、帰りたと言った時、私は勉強を無理に続けることにした。私は、状況をはっきりさせられるかどうかを理解するために、いわば、「火に油を注いだ」のである。いったんは激しい癩癩を起こしたが、その後そのことについてできるだけ客観的に話し合っていくうちに、彼は自分の行動についてよりよく理解できるようになった。幸運なことに私の直観は正しかった - 私は彼の重度の注意力散漫によっても決して損なわれることがない振る舞い方をはっきりと示していくように彼をやさしく促すことがなくても、同じパターンでお互いの交流を続けることができると感じた。私が彼のことを判断するようなことはせずに、単に起こった事に注目し、個別指導関係において彼にとって適切な振る舞いがどんなものであるか説明する時、彼はいくぶん心穏やかになったように思えた。私が仕事を静かに行うために自分のデスクに向っている間、私達には意味のある課題をするのには

まだ十分時間があることを告げて、私は彼に「ちょっと休憩」する時間を与えた。彼がかつとなっても私達のセッションは決して終わらないことを強調した。10分間、彼は私と共に小論文の勉強をもう一度始める準備をしていた。

彼が帰った後で、私達が成し遂げたことについてよく考えてみた。リックは権威のある人物と一緒にいるとほとんど最「悪」の状態であったが、彼は否定されなかったので、信頼関係が確立された。彼は自分の癩癩が私と一緒に勉強をしなくてもよい言い訳にならないこと、そして、支援センターは（癩癩を持った）彼自身であっても、安全な場所であることを学んだ。しかしながら、とりわけ大切なことは、彼が自分の障害がどのようなものであるのか、そしてそれにうまく対処するには何が必要であるかを学ぶという長くて厳しい道のりの本当の第一歩を踏み出したということである。

そのすぐ後に、私は、リックを説得して、必要があれば、彼が静かな部屋で時間を延長して試験を受けたり、課題の適切な締め切り延期ができたりするように、彼の担当教授達に話してもよいという許しを得た。私は彼に（性格）判断テストをもう一度受ける必要性を彼に説得しつつつけたが、彼は受け入れる準備が出来なかった。しかしながら、私は彼が504条項に照らして適切に支援を受けられるのに十分な情報を彼の高校の記録から手に入れた。しかし、そういった種類の事柄や彼が抱えていた問題の内容について私達が知ることができることは限られていた。彼が文書によって障害を確定されたくないと思っていることは明らかだった。そして、さらに調査することを拒否したのは、忌避する戦略であり、それによって彼はしばらく安心を確保した。私達はいつもの学習戦略を継続した。つまり、すべきこと詳細に書き出し、日付をきちんとつけ、責任というものに注意をするようにさせ、チューターと一緒に読み書きの課題をこなし、テストの間違い分析をして、次のテストに備え、効果的なノートの取り方や勉強に仕方についての基本的な原則を繰り返し学習させるようにした。私達が発見した唯一の変わらない点は、リックは次のセッションに引き継がれるものがほとんどないということだった。したがって、以前のセッションで行ったことを継続的に強化させるようにする工夫が彼の個別指導には組み込まれた。

幸運にも、私は彼を説得して、大学のカウンセリングセンターの個人カウンセラーと協力して彼と接することができるようになった。そのセッションは怒りや、不満、不眠症、「度を越した」感情、不安、行動をチェックする力がないことを扱うのに、いくぶん、役に立った。こうして、教科の学習課題に関わる問題を扱うための時間をセッションの中で多く取れるようになった。概して、彼は管理されていないと集中力をすぐになくし、悪い状態になってしまうので、継続的な介入が必要であった。私達はみな彼に関して多くの「後退」や「巻き返し」を経験した。そして、それは重度の注意力欠陥障害の人には、よくあることである。卒業する少し前に、彼は私に、長い読書の課題は一度も終えなかったと思うと言ってきた。彼は、試験を切り抜けるのに、講義や授業のノートに多くを頼っていた。

とうとう、3年の時に、近くの開業医のところで、最新の（性格）判断テストを受けるように彼を説得することができた。その報告によると、彼は確実に深刻な注意力欠陥障害であった。そして、他の肉体的な要因を勘案するために精神科医でもある医者への照会が提案された。彼の神経的なテストは正常であった。それを経験した後で、彼はもうどんな医者にも見てもらいたくないと決心した。数ヵ月たってからやっと、彼を説得して

ADD/ADHD である青年と大人の診断と治療を専門としている地元の精神科医に見てもらった。私達2人は、大きな期待をもって、リックに関するきちんとした診断と薬物治療の結果を見守った。最終的に私達2人はその結果によるんだ。

彼に処方されたリタリンが効果をあらわしたある朝、違った若者が私の部屋の戸口に現われるのを目にした。彼はリラックスしてドアのわき柱に寄りかかって立って、微笑を浮かべていた。そして、「こんにちは」と言った。私は彼と親しくしているチューターを呼び、彼が私の研究室のいつもの席に座った時、私達2人も腰をおろした。私達は彼を良く観察した後、すこし驚いて顔を見合わせた。足を小刻みに震わせたり、パタパタさせたり、手をピクピクさせたり、目をきょろきょろさせたり、否定的な感じが漂ったり、考えや会話がうまく出来なかったりということが全くなかった。彼はまとまりのある理解可能な会話を以前より上手に続けることができ、皮肉の刃を伴ったいつもの機転のきいたひねたユーモアはいつもよりよどみなく快活であった。このような状態があらわれたであろうと同じ速さで自然に消えていくのを恐れて、個人授業のセッションにはやく行くように彼をせきたてた。したがって、彼は薬物治療を受けるか考えている時にはうまくいかなかった課題をうまくこなすことができた。後に、彼は私の研究室の戸口に立って、薬物治療によって随分効果があったと私が考えるかどうかたずねた。私は彼にそれによってある種の生化学的な「調整」ができて心を集中させることができるようになったと思うとは言ったが、私達はとても長い間大変な課題をこなしてきたから、それ以上は言えなかった。彼は薬によって大変効果があったという私の考えを快く思っていなかったが、薬がきれたり、飲み忘れたりした時は、症状がまたあらわれることがよくあった。しかし、私達が用いた外的な戦略はリタリンと結びつくことによって最終的には「効果を持ちはじめ」たのであって、全てがひとつの切れ目のない過程だと信じていたし、彼にもそのようにはっきりそのように伝えた。

学位を完了させる4年生の時、リックは夏季に追加のセッションが一つ必要なだけであった。私達は彼に単位をとるペースをゆっくりにして、もう1, 2学期かけるのがいいのではないかと提案したが、彼は自分のクラスの他の学生とできるだけ同じ時期に卒業すると決心した。卒業するまで彼は私達の支援を活用し、カウンセリングセンターにも通い、リタリンを服用しながら精神科医にも相談した。私達は彼の成績が全体的に見れば、C+へと上がるのを見た。そして、彼の行動が安定し始めたのを喜んだ。彼は自分の将来に対する計画さへ練り始めた。それは、以前には注意を向けることもできなかったことだ。問題は彼の大志は「現実」と折りあいが見つからないことがよくあることだ。彼は自分そのような状況に置かせている学習障害や制限を受け入れるのにいつも大変苦労していた。CIA やシークレットサービスの仕事につくことは不可能だったので、彼はがっかりした。彼が持っていたこの「こと」を学校とだけの関係にしたいと彼は必死になった。それがどのように生活全体に関わる問題であるかについて、私達は彼と長い時間話し合ったが、彼にはそれが全く理解できなかった。私は彼が学校をはなれ、自分で外の世界にそれを見つけなければならぬと悟った。不幸なことに、彼はそうしてしまった。

私はリックと電話や手紙に多くの時間を費やし、彼の大いなる変革に手助けをした。彼は家族と暮らし、彼の教育や知的能力に与えられると彼が思っているところの誰にでもできる仕事をがんばって続けていた。彼は自分の兄弟のように、仕事を成功させ、自分で生

計を立てたかった。彼は精神科医の援助を受けつづけるのに気が進まなかった。そして、恐らく、薬物治療も。フラストレーションがたまる日々が数ヶ月も続き、さらなる援助を求めることとなった。それは多少役に立っているようであるが、重度の注意力欠陥障害によって完全に自分の力で生活してことは困難である。とにかく、今のところは。

リックがより大きな世界で自分にあっている場所を見つけ、それが彼独特の振る舞い方のよい良い面を十分活用できるようなところであることを私は最終的には信じている。彼はまた、カウンセリングをしながら時間経つにつれて、自分が誰からも好かれる大切でいとしい人間であることを学ぶようになる。彼のとどまるところのないエネルギー、粘り強さ、そして、皮肉のきいたユーモアによって彼はずっと学校にいられたのだし、それらの資質によって人生もうまく切り抜けられるはずだ。私達がそのままの彼を受け入れた時のように、もし彼が違っていることが必ずしも悪いことではないということを受け入れることができるになれば、それは私達を驚かせるだけでなく、大変な仕事についてもうまくやっていけるでしょう。それが、私達が彼に望むことであり、さらには、受け入れること、教えること、カウンセリング、忍耐強さ、友情、粘り強さについて彼から教えられたすべてのことが、彼の決してして知ることもない学生の手助けとなることを望んでいる。おそらく、将来、このことを、彼は自分の素晴らしい成功例のひとつとして気が付くことになるであろう。

バリー：(障害のある)学生を社会に適應させていく活動に関する事例研究

by Jeanne L. Higbee

5年前、一人の同僚が授業開始の日に私の研究室の扉をノックして、こう言った。「あなたはバリーのカウンセラーよね。彼ったら信じられないわ。人をだますのがなんてうまいんでしょ。あなたに会って、彼のことちょっと話しておこうと思って」彼女は最初の授業の後でのバリーとの出会いについての話を続けた。「なんてお涙ちょうだいの話なの。彼は私に親の車の中に新しい小切手を忘れたので、本を買うお金がないって言ったわ。それから、私に私のATMカードを貸してくれって聞いたのよ。信じられる？」

私達の学校組織体制と学校の障害者支援センターとのつながりから、私はバリーの名前ですぐに誰だかわかった。新しい年度が始まる前に、私は学習障害センターと学校の障害者支援事務所の両方から自分で障害者であるとわかっている学生のリストを受け取る。その時、学校において適切な配慮を提供するために、学生の障害に関して特定の情報を学部の教職員と共有するための許可を求める。

私は同僚を私の研究室に迎え入れ、バリーのファイルを調べてみた。それには、行き届いた人物紹介と学習障害センターからの(性格)判断テストの結果が含まれていた。私はバリーが読字障害に加えて、組織化欠陥があると説明した。彼は非常に誠実で、良心的であるので、わざと人をだまそうとすることは決してなかった。もっともありそうな可能性は、それまで自分で自分のお金を扱ったことがないのでATMがどのような仕組みになっているのかわからなかったというものであろう。私はその同僚にバリーと話してみることを約束した。

バリーに電話をかけ、ノートテイクや（性格）判断テストなどの配慮が潜在的に必要なかどうかを話すために私と会うように頼んでみた。ミーティングの後で、私はバリーを担当している教授と話したことをさりげなく伝えた。バリーは、もし彼がだれか他の人のATMカードを自分の暗誦番号で使えば、（彼はそれを両親のたつての希望で暗誦したのだが）自分の口座からお金を下ろすことができると思っていたのだった。はじめ、その同僚は疑っていて、私のだまされやすいのではないかといっていたが、バリーに有利に解釈しておくといった。

このサブチャプタの目的は障害をもつ学生達を社会に適応させる問題の例を提示することである。学習障害について完璧に理解している学部の教職員でさえ、その学習障害に伴う不適切な行動パターンに気がつかないことがよくある。さらに、後天的な脳の障害や精神障害をもつ学生は、大学のレベルで増えつつある障害学生の2つタイプである。こういう学生の中にはちょっとしたことで不満がたまったり、不安になったりする学生もいて、その振る舞いが感情を映し出している場合がある。法律によって、学校組織は、混乱の原因となる学生、言い換えれば、他の学生が授業から得られる利益を十分に受けられる機会を邪魔するような学生には支援をする必要はない。しかしながら、可能な時には、他の学生の権利を侵害しないのなら、学部の教職員はそういった学生にも配慮することが望まれる。

バリーの教師に報告を受けた最初の問題行動に対処した後、私は学習障害センターに連絡をして、「担当者会議」を開いた。バリーのテストを担当した学習障害センターの職員や毎週カウンセリングを行う担当者、テストに関する配慮を考える担当者、個人教育計画を立てる担当者に加えて、はじめの学期にバリーを教えている学部の全教員も集まってもらった。その会議で私達はバリーの評価テストの結果を確認し、教育するにあたっての影響について議論した。学部の教員は皆、教室でのバリーの振る舞いは、反抗的で、敵意さへ感じられると報告した。彼の態度によってそれぞれの授業の雰囲気は確立されつつあった。バリーは教師の権威に挑戦するような質問をして、講義を邪魔することがよくあった。他の学生は不満がたまり、正常な授業の流れをバリーが邪魔するのでいら立っているようであった。学部の教職はもしバリーに対処するために授業時間を使いつづけるならば、講義内容を適切に終わらせることができないのではないかと心配していた。彼らはまたバリーが教室の環境にあたえる否定的な影響に腹を立てていた。バリーと個人的に交流する場合には、もっと肯定的なようであった。彼は快活ではあったが、人をだますところがあるとみなされていた。

生涯学習センターの職員はバリーが授業中に邪魔をするのはバリー自身の不満をあらわしているのだと説明した。この否定的な振る舞いをなくさせる解決策は、バリーが持っている厳格な教育環境の中で自分が負けないでやっていけるかという不安を軽減することだった。彼が利発で、ある科目では才能さへ感じられることは疑いなかった。彼は障害のために、特に筆記テストの成績が悪かった。バリーは情報を記憶してそれを論理的に組織化することが出来なかったため、その結果、（解答をする際に）消極的な態度になってしまっていた。生涯学習センターの職員は学習効果を高めるために勧められることのリストを提供した。

まず、バリーにはそれぞれの授業に1人のノートテイクが提供された。その時、彼は

話されたことを紙の上にどのようにまとめて書くかよりも教授がはなしていることに集中できるようになった。そして、バリーの試験は学習障害センターにおいて口頭で実施されることが同意された。それぞれの試験が教員用に録音された。各々の教師がバリーと毎週個人面接を行い、(学習内容の)明確化と支援を行った。私は毎週経過報告を受け、個人面接をしながらバリーとそのことについて話し合った。私はまた彼と彼の教室での振る舞いについても話し合った。彼は絶対に必要な質問だけをする、できるならば、授業が終わるまで待つように努めることになった。学部の教員には、授業の始めにその授業の流れをあらかじめ説明し、終りにはまとめをし、もっと多くの資料を配るようにとの方向性が確認された。振る舞いに関するどんな問題も私に報告されることになった。

バリーが大学で快適に過せるようになったので、私と教員との接触は少なくなった。ほどなく、バリーは私の研究室のドアをロックした学部教員の信頼を得るようになり、バリーは彼女の研究室を毎日訪れて、担当科目の内容に習熟するために特別な援助を求めた。その学期が終わるまで彼女は彼のために履修に必要な客観テストに関するオンブズマン(相談役)になった。

私はこの前の春に学習障害センターの表彰レセプション(?)でバリーと話をした。彼はレクリエーション研究の教育学士の学位をとってまもなく卒業することになっていた。インターンの経験を通して就職も決めていた。バリーは大学にいる間信頼を寄せていた学部の教員、つまり、私の同僚にこの話を伝えてほしいと私に頼んだ。

バリーの問題は、障害をもつ学生の間では特別のことではない。大学関係者はこのような学生達が、教育的にも、社会的にも適応できるように支援する覚悟がなければならない。そして、学生の必要性に的確に答えるために、学習についての認知的そして感情的な面の関係を意識しなければならない。

お話ししましょう

by Nancy Poling

恐らく私はいつもよりリラックスした気分だった。というのも私の一日の活動を文書にした時、私が学生と一緒に過す大抵の時間は、会話をして過していることがわかったからだ。例えば、読書の宿題を理解したり、論文の校正をしたりという私達がいつもしている目的をもった活動から離れて、テーブルのところに腰をおろし、学生の関心や興味のあることについて話し合っていた。ロバートは視覚障害の若者で、歴史に興味があり、彼が最近読んだ中国の最後の皇帝についての本のことを詳しく話してくれた。マイクは学習障害のある内気な若者で、NBC と GM の間で最近起きた出来事の倫理問題について話すためにコミュニケーションの宿題を後回しにしたいと思っていた。ポーラも学習障害があったが、哲学の授業で話題となった自由意志と決定論に関する私の意見を聞きたがった。

私の一日を振り返るとき、この学生達と過すことのできた交流の時間にあれこれと思いをめぐらすことから始めた。彼らは自分達の考えを誰と話し合うのだろうか? そう考えた時私が思いつくのは、社会的に孤立しているというイメージであった。

このイメージは特にポーラに当てはまるように思えた。彼女はアフリカ系アメリカ人で、

一日の大半は、白い（白人の）キャンパスにいる。痩せようとして健康を害してしまう女性に囲まれている太った女性だ。居住区のあるキャンパスへと通う学生だ。小論文形式のテストを受けなければならなかったり、期末レポートを書かなければならなかったり授業とは相容れることのない学習スタイルを持っている学生である。

2年の間、ポーラはたびたび援助を受けるために学習センターへ立ち寄ったが、彼女が私のところに定期的に会いに来るようになったのは、毎週小論文の提出が必要な哲学概説をとってからだ。徐々に学習者としての彼女の歴史が広がっていった。公立の学校機関では、彼女は学習障害であると判断されて、特別教室に組み入れられていたが、彼女の障害が何を意味しているかを彼女に説明する人はいなかった。彼女は自分には知能がたりないのだと思っていた。

しかし、彼女は控えめではあったが、大学教育を受けることに固執した。たいていは、教室の後にすわり、自分の考えがばかげているとおもわれるのを恐れて、議論には決して参加しなかった。頭の中では疑問や意見が渦巻きながらも、目立たないように上手に振舞っているポーラの姿が私の目に浮かぶ。

現在は、私の研究室の中という他から干渉を受けない場所では、彼女は頭の中で渦を巻く素晴らしい考えについて話し合うことができる。哲学の小論文を書く時、私達はその宿題（課題）が喚起する問題について活発に話し合いをする特別な時間を取った。その学期の間にポーラは自分が考えることができるのだということを発見した。私は教育のためのツールとしての対話の重要性を再発見した。もちろん、その益するところは大昔にソクラテスが見抜いていたのだが。

対話は学生の知的活動をはっきりと確かめることができる点で大切である。正しい答えを探す時と違い、（対話をすれば、）話し合いをするもの同士が、相手とは共有できる考えがあるのだと感ずることができる。また、教師が思考スタイル作り出せば、生活を通して知的な成長や交流の大切さを具体的に示すことになる。

対話は学生に刺激を与える。中国の最後の皇帝についての話し合いの後で、歴史科の学生は、スピーチの授業でその話題を用いた。コミュニケーション科の学生は期末レポートに倫理学の話題を選んだ。ポーラはそれ以来、自分のことを学生、本物の学生だと考え始めるようになった。

次の学期に社会学部長が、ポーラが私と一緒に自主的な研究をはじめてもよい、という許可を与えてくれることになっている。私が彼女にアフリカ系アメリカ人家族の歴史についてかかれた最近の本についてどう思うかたずねたとき、彼女の目は輝いた。彼女はレポートを書く必要がなく、本について議論をすればよいといったとき、彼女は本当に喜んだ。彼女が熱心な学生になることに疑いはない。

学習障害や身体障害をもつ学生たちは、自分の考えや疑問を話し合う機会が限られていたのかもしれない。発達に関係する教育者は、話し合いの機会を率先して設けたり、教育と社会交流がうまくかみ合う公開討論の場を作り出すなどして、社会的孤立を少なくすることができる。

学生のための教育的な配慮

社会的行動の異常や調和することが難しい学生のために

追加資料

場にそぐわない合図の振る舞い

ノートテイカーあるいはテーブルコーダー

交互にする試験のロケーション

話し合う授業での振る舞い

点在するデッドライン

毎週のミーティング

学習スケジュール

学生の成長と成功を促す連携組織

障害、すなわち障害があることへの配慮は、まさに教育界に関係したことでなく、すべての生活に関係した問題であると言える。このことは、高等教育機関やその教育者たちが、障害をもつ学生たちに配慮を図る責任があるということである。そしてその配慮は、障害をもつ学生たちを中心に位置づけされなければならないものである。学生のための調査をする機会にあっては、次のようなことを心に留め置いて行われなければならない。それは、障害をもつ学生たちの弱みや限界を最小にすると同時に、最大にすることができる力を見いだすために、障害をもつ学生が必要とする支援のための調査である。高等教育機関の最終的な目標は、学生自らが経験をし、自信をつけるということである。この本におけるサブチャプタでは、高価なテクノロジーや莫大な予算は、学生を成功に導くために必要とする最も重要なものではない、また広範囲に渡るネットワークは、すべての学生にとって学ぶきっかけを提供するというものではないということを示している。この章におけるサブチャプタではまさに、それぞれ社会的に認められている機関で貢献している著者や学生によって示された重要な支え合いについて要約したものである。

障害をもつ学生のための教育戦略と配慮

ウォンダ・ベア

数年の間、私は学生と教師、そして学部教員とともに働いていた。その仕事は、学習を支援するための方法を開発することであった。私は、十分な時間と適切な教育スタイルと戦略を使うことができれば、個人で学ぶことができると信じている。個人で学ぶことには、限界があるかもしれない。しかしこれらの限界は多くの場合、自分自身で限界を設けてしまっているか、あるいは社会的に限界を設けてしまっているかである。私はまた集中して学ぶことを経験した。このことは大変必要なことであるけれども、私たちは学生が“学び方を学ぶ”という、学ぶことを手助けする面では失敗してしまった。このことは、通常の教育指導法では応えることができない学生に対しては通用しない無力な教育法であることを時として意味している。通常の指導法では応えることができない学生とは、身体的、情緒的、あるいは学習することに障害をもつ学生たちのことである。個人的なニーズに配慮するいくつかの指導法で、これまでとは違う別な指導法に代わるもの、あるいはいくつかの指導法の中から選択させることができると考えるかもしれない。しかし私たちは、特別な配慮を考えているのであり、これは妥当なことではない。活動分野をもっと平等にすることで、だれもが等しく学ぶ機会をもてるようになる。教師たちは、何人かの学生の特別なニーズを満足するための教育方法と戦略を適用させることで、すべての学生が利益を得ることができることを見いだした。それゆえ私のコメントと提案は、すべての学生にとって役立つものであり、さまざまな障害をもった人たちに大変重要なものである。

成功する学生を育てるためには、効果的な学習戦略と学習習慣を備えなければならない。成功するために熱心に学習するという論理は、どのように読んだらよいのか効果的な読み方がわからない学生、よく書かれたノートにも関わらずその重要性がわからな

い学生、どのように学習時間を計画してよいのかわからない学生、またテストをどのように受けたらよいのかわからない学生にとっては難しい。学習戦略は、障害をもつこれらの人たちのために、学習を補う技術とともに教える必要がある。

動機付けは、学習における別の意味で重要な要素である。そして学習のための重要な要素である動機付けは、ほとんどの学生たちにとって動機づけとなっていない。大学は、規律と認可の基準を満足するためのカリキュラムを作り上げている。それは産業界のためにもそうしているのである。学生たちは、目的に向かって作られている履修科目の関連性の意義を必ずしもわかっていない。このため、学ぶことにほとんど興味をもたない。ひとたび学生たちが情報を使い学習する理由と方法をわかっていけば、そこにはより多くの動機付けが必要である。

学生たちは、多くの場合、特別な学習スタイルについて知っているわけではない。そのため学生たちは自分たちの強みをどのように生かすのか、また自分たちの弱みの分野をどのように強めていくのかわからない。障害をもつさまざまな学生たちは、自分を引き立たせるためによりわずかな強みしかない。このため学習スタイルにおいては、特に弱い。障害をもつ学生たちに“学び方を学ぶ”ためのフレームワークを提供することは重要なことである。“学び方を学ぶ”は、まさに大学時代の間だけではなく、生涯にわたるものである。

大学における学生オリエンテーションの中で、特に障害をもつ学生たちには、次のことに権限が与えられるべきである。それは、障害をもつ学生自身自身の学習ために調整を図ってくれる、責任をもってくれる学生が得られることである。そして障害をもつ学生たちに、目的に向かって取り組むための学習スタイルを詳しく書いた表や、能力評価、学習戦略の使用について書かれたものを提供すべきである。利用できるすばらしい道具が多くある。しかしながら情報提供としては、十分ではない。学生たちは、学習を成功させるために情報をどのように使うのか、そしてある情報を他の学問分野にどのように生かしていくのかを知っている必要がある。このことは、日々の学習活動を通して補強すべき事項である。

障害をもつ学生たちは、しばしば高校時代に指導教員を通して課外の特別な支援を受けている。これは時としてあまり良いことではない。学習科目を理解するあるいは情報の使い方を理解するためのテクニックや戦略を得ていくというよりもむしろ、授業を通して授業内容を覚えていくことに焦点が当てられているからである。指導教員による教育は、大きな価値はある。しかし学生がひとり立ちできるような支援に向けられるべきであり、それにより学生たちは産業界の中で成功を収めていくことができるのである。

学生たちを指導している時期に学部の教職員は、学生を成功に導くためにどのように支援するか以上に大きな欲求不満を経験するにちがいない。特に、特別な支援を必要とする学生たちに対してそうである。そこには簡単に解はみつからないし、また叩いてでるような答もない。ここに成功を試みたいいくつかの事例を示してみる。

- * 学生を成功に導くほとんどの教師たちは、指導に対する高い知識をもっており、さらに教育科目に対して非常に熱心である。教えることを楽しんでいる。
- * 学部の教授たちは、示されている内容における学習スタイルやその利用方法に気づかなければならない。

学習サイクルの利用：なぜ、何、どのように、たとえば発表促進、プロジェクト、課題
学習理解：視覚、聴覚、運動感覚

- * 学部の教授たちは、学生個々の学習スタイルに気づかなければならない。あまりにも私たちは、私たちの個人的な学習スタイルにあてはめた同じような方法で教え、指導し、訓練している。こうしたことは、私たちが担当する多くの学生たちと相互作用が生まれにくい。
- * 学生たちはまた、学生たちの好みにあった学習の多様性を必要としている。学部の教授たちは、個人的な違いによる評価を下すことを必要としている。学ぶ方法について正しいものは一つとしてない。クラスで、学習をしている過程で学生の気づきが増すよう情報を補い、授業中の発表や活動、その他もろもろのことに対して学生の好みに注意を払う必要がある。
- * 学部の教授たちは、学生たちの多様化に応じることで学生たちが達成できるコースの目標の設定や達成できるさまざまな方法に注意を払うべきである。学生たちには、これらの目標を満足する選択が与えられなければならない。
- * 学部の教授たちは、学生個々がもっている力を利用するために、協同的な学習を進めていかなければならない。
- * 学生にとって有意義な会話は、問題解決の糸口となり役立つ。学生たちは、効果的な学習ストラテジーやテクニックを彼らの経験を通してうちたてている。そこで学部の教授たちは、学習や問題解決、その他にさまざまなアプローチで説明する機会を学生のために作っていかなければならない。それにはいろいろな方法がある。
- * 私たちの経験してきた学習過程を共有しましょう。私たちの学習過程を説明することなく、教授たちはあまりにもしばしば学習の手順ばかりを説明する。
- * 各講義のアウトラインを黒板に書くか、レジюмеによって講義のアウトラインを示しなさい。
- * 授業中の議論の際には、より高いレベルの質問を組み立てるブルームの分類法を使いなさい。これは学生の高度な思考技術を高めることになる。
(ブルームの分類法：Bloom's Taxonomy ブルームの教育目標の分類学のこと。)
- * 授業での議論は、聴覚や視覚に問題のある学生にとって価値あるものである。
- * 可能であるならば、時間に制限を与えない試験を行う。試験の目的は、学生の思考過程がいかに速く働いたのかではなく、学生が何を学んだのかを見いだすためのものである。

すべての学生にとって最良の環境を提供することに努力している大学は、シミュレーションによる実践を利用した教授たちによるワークショップを設けている。このワークショップは、障害をもつ学生たちのさまざまな障害の困難さをより理解するためのものである。学生を支援するために、学習に対するバリアーを乗り越えるための多くの効果的なストラテジーがある。しかしながら学生の個々のニーズは異なっている。時として、最も有効な活動は何かを学生に尋ねてみることである。” どうすることが一番いいの？ “ っと。

学生にとって自分の学習に対する責任をとることは、重要なことである。しかし教師たちもまた、学習を支援し、能力を高めるために、学習に対して学生に励ましを与えること

や、学生に刺激を与えるプレゼンテーションを行うなどさまざまな教育ストラテジーを使うことで責任を取らなければならない。教えることと学ぶこと、コインで例えるならば両者がお互いにコインの反対側にあるのではなくコインと同じ側になければならない。

人間として、私たちはだれもが学習者である。

学習者として、私たちの何人かは似たような方法で学習する。

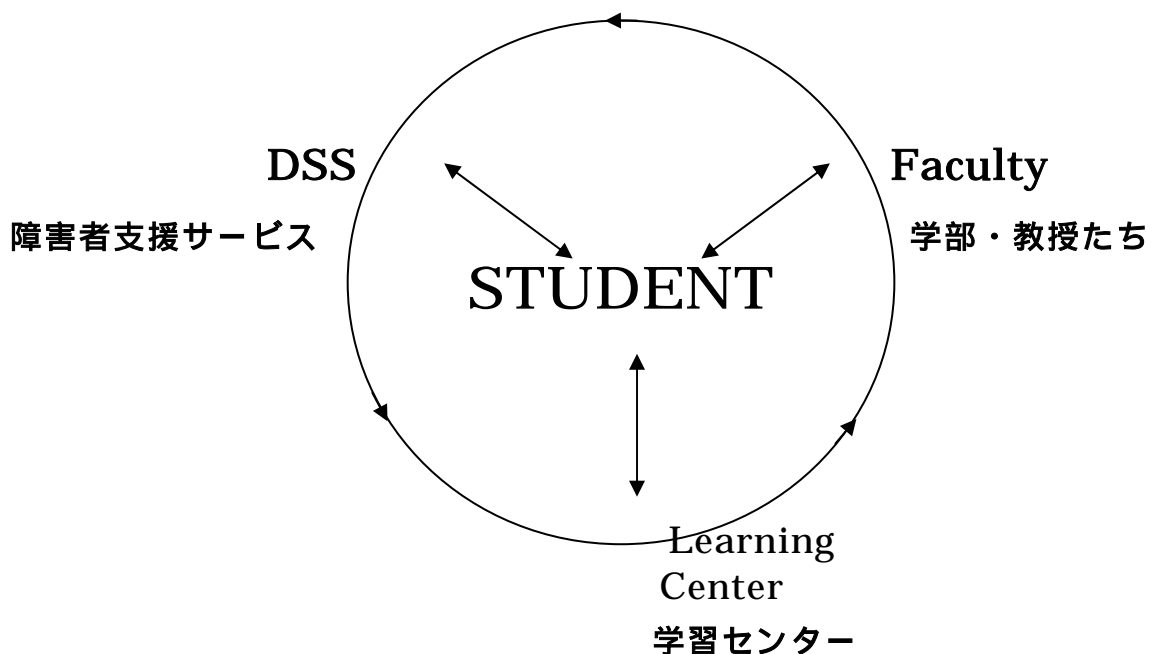
学習者個人として、私たち一人ひとり異なる方法で学ぶ。

私たちが、これらの違いを認め、確信し、受け入れたとき

私たちは、学習に対して全ての権限が与えられる。

サブチャプタではまた、教えることと学ぶことを個人的な側面から示している。学習を成功に導く大学は、学生ごとに学生に違いを作るまさいよ教師の結果である。これは、秀でた人を目指して励んでいる全ての学生のために機会を提供している管理部門の支援によって達成されている。これらの専門家によるネットワークは、大学や他の高等教育機関で学生のために存在している連携の代表である。連携は、学生を中心に置き、放射状に中心から伸びる3つの機関で構成されている。構成する機関は、学生の周りに DSS (Disability Support Service : 障害者サポートサービス)、学習の達成を促進する学習センター (Learning Center)、そして学部・教授たちである。

学生を成功に導く連携モデル



学生

学生の責任として、学習で支援が必要な時には教師に自分自身のことについて打ち明けていくことがある。学生は、自分に合った最も適した学習モデルを積極的に探し、そして

自らを高めるために、その学習モデルをどのように使うかである。学生は、次に述べる3つの構成要素が自分とともに相互に作用しているということを心に留め置く必要がある。

障害者サポートサービスオフィス (DSS)

このオフィスの責任は、障害をもつ学生のために、障害に対応するための基盤と組織を提供することであり、他の機関と連携して大学集団としてうまくサービスを提供することでもある。このオフィスは、学生の公式の記録を保存する機関でもある。記録は、学生の学術や医療に関するすべての記録であり、それがこのオフィスに保存される。またこのオフィスは、障害の決定や適切な配慮に何が考えられるべきかと同じように、配慮の必要性について書かれたガイドラインが必要である。

このオフィスは、学校が始まると学生にとってはしばしば最初に出会う機関となる。DSSは、ミーティングを設定する機会を学生に提供する責任をもっている。この章における著者は、このオフィスの専門家が障害をもつ学生と個人的に会うことを提案している。そして似たような障害をもつ学生と円卓を囲んで議論をする機会を提供している。いくつかの学校施設が月毎にこれらのことをうまく実施している。この実施にあたり、セメスタあるいはクォータの初めにこれらの会合についての日程計画をたてる。学生は個人的なカレンダーの中にこの日程を記載することになる。このオフィスの責任には、個人的に学生と会って、計画チャートが目標に向かって進んでいくような短期的・長期的な両方の目標を設定することや、必要に応じて計画を修正することで学生を支援するなどがある。

学生とすべての大学のサービス、たとえば寮から食堂施設へ、教室へとの間の連絡がこのオフィスの仕事である。学生が自分自身の能力で教育目標を達成し、より信頼を得るにしたいが、DSSは、学生とのお互いの関係をだんだんと少なくし、距離をおくようになる。このチャプタの著者はまた、次のようなことを言っている。この大学施設にずっといる学生たちは、大学施設に新しく入ってくる学生のためにメンタやグループリーダーとして長く奉仕している。このオフィスは、学生のために介入や擁護をする。しかしながら学生たちがより自立し、雇用を得る社会に入っていくための準備ができるようになるとその利用は少なくなり、果す役割は減少する。

さらに DSS は、大学政策に関連した学校教職員の連携サービスを担っている。発生した問題によっては、ケースバイケースが要求される。そして起こりうる問題のために計画をたてる効果的な委員会が適切な場所に置かれていなければならない。たとえば、聴覚障害の学生は、ASL (American Sign Language) が外国語履修の単位読み替えが可能であることを要求するかもしれない。委員会は、大学に在籍する学生のさまざまな局面をとらえておくべきである。

このオフィスはまた、障害をもつ学生の配慮において、教え方や学部を支援する責任がある。DSSにおける専門家たちは、個人的に配慮を図ろうとする教授たちのために対応できる資源をもつべきである。このことは、個人的にあるいはグループにおいて教授たちと討議がなされることであり、継続的に行われる基盤の上にならなければならないことである。

学習センター

学習センターの責任は、学生の学業の達成を促進することである。ただ学生に、何をす

べきかを話すことの多くは必要ない。学生たちは、彼らにとって何が適切か、彼らの学習スタイルにあった一番満足できる配慮は何か、学習生活において何が必要かを見いだすために、訓練され、指導される経験をする機会が必要である。このセンターは、学生たちが学ぶことについて学ぶ場所であり、次の2つの質問の解を探す場所でもある。

1. 私の学習の強みは何？
2. 私の障害がどのように学習に影響の？

このセンターは、学生がスキルアナリストの指導のもとで学習を進めていこうとする場所である。スキルアナリストはというと、大学教育機関の教師とは切り離されている。学習スキルストラテジーは、ノートカードのような簡単なストラテジーから色の塗り方、ペン、紙や照明にいたる実験まで、保障技術とともに教えられる必要がある。理想的には、学生を支援するテクノロジーは、学生のためにこのセンターで利用できるか、あるいはこのセンターの近くで利用可能であるべきである。コンピュータや作図用計算器、ビデオテープ、テープレコーダーは、学生が使いたいときには使えるようにしておく必要がある。これは、手クログロジを使うことで個人的に訓練がされるということと同じである。学習センターには、また試験に対して配慮が必要な学生たちが利用できる試験室がある。

指導教授は、スキル分析者として、学生の学習の強みや学習スタイルの好みを調べ、学生たちを手助けすることができるように養成されるべきである。スキル分析は、教育分野や特別な教育分野の中でよりレベルの高い学生たちに使われるよう提案されてきた。

ブルームの分類法に基礎をおいた高度な思考スキルの開発は、利用できる。学生たちは、ブルームの分類法を使うことで特定の科目の問題点を組み立てる練習をすべきであり、スキルアナリストによって導かれた知覚の段階を高めていく練習をすべきである。学習センターのもつ資源は、障害をもつ学生たちのためだけでなく、すべての学生が利用できるべきものである。学習センター施設は、また学部教職員にとっても利用可能とし、職員は、学習センターにおける特別な資源を学部教職員のためのワークショップに役立てるように提示すべきである。

学部・教授

学部は、学生に対して学習の励ましを行い、学習を促し、学習者を反応させるさまざまな教育ストラテジーを使って、学習による能力向上を高める環境を提供する責任をもつ教育者から構成される。一般的に、シラバスは、学生が学部教授たちと最初に出会うものである。このためシラバスは、障害をもつ学生ができるだけ教授たちと触れあいができるよう励ます記述とともに、コースの方針とコースにとっての要求が明確に記述されるべきものである。ひとたび学生が自分自身をさらけ出してしまったならば、教師は議論や適切な配慮を提供するための責任がある。教師たちは、学生たちの立場に立って学習スタイルを押し付けることのないよう注意を払いながら、多様な表現を用いて授業を行うべきである。教師たちは、黒板に書いた文字の全てについて声を出して読みあげるべきである。口頭にて付け加えて書いた簡単なことも同様である。また教師たちは、授業の始まりには前回の復習をし、授業の終わりには要約するなどをすべきである。授業におけるアウトラインは、必要に応じて図やグラフを用いて、黒板に書くか、オーバヘッドプロジェクタで投影する

か、あるいは講義のためのレジюмеで提供するようにするとよい。ブルームの分類法を使った教授たちは、どのように学生たちが学ぶのか、どのように学生たちが考えるのか、どのように学生たちが高度な思考技術を備えていくのかに気づくことになる。学部・教授たちは、学生たちの多様性に応じることで学生たちが達成できるコースの目標の設定やさまざまな方法に注意を払うべきである。学生たちは、定まった目標に出会うためにその選択の準備ができているべきで、それには学生のもつ力を最大にするための共同学習も含まれている。